ビルマ植民地期末期における仏教徒カレンの歴史叙述

――『カイン王統史』と『クゥイン御年代記』の主張と論理――

池　田　一　人

目　次

はじめに
第１章　カレンにおける仏教
　第１節　カレンとキリスト教
　第２節　民間民族誌における歴史叙述
　第３節　ふたつの仏教
第２章　筆者の背景
　第１節　ウー・ピンニャの背景
　第２節　ウー・ソオの背景
　第３節　歴史叙述の範型
第３章　テキストの主張
　第１節　ウー・ピンニャ『カイン王統記』
　第２節　ウー・ソオ『クゥイン御年代記』
　第３節　論点の整理
第４章　テキストの論理
　第１節　ウー・ピンニャ
　第２節　ウー・ソオ
　第３節　宗教・王権・民族
おわりに

はじめに

ビルマにおいて最大［1931 Census］，あるいはシャンについで第２の人口規模を有する［1983 Census］とされる「少数」民族，カレン（Karen）(1) のあいだに，ビルマの外側の世界にほとんど知られることなく，今でもひっそりと受け継がれている３つのカレン史書がある。いずれも植民地期末期の10年ほどのあいだに初版が出版されていて，ビルマ民族中心主義的な戦後政権下の厳しい検閲制度をくぐりぬけていくつかは再版され，それらを底本とした歴史書やパンフレット，要約版が編纂され，あるいは地下出版やコピー製本のかたちで流通してきた。

それら３書とは，ウー・ピンニャ（U Pyinnya）によってビルマ語で書かれた『カイン王統史（kayin yazawin)』（1929年出版），ウー・ソオ（U Saw）によってやはりビルマ語で書かれた『クゥイン御年代記（kùyin maha yazawin dojî)』（1931年）(2)，そしてソオ・アウンフラ（Saw Aung Hla）によるスゴー・カレン語の『プアカニョウの歴史《pgaMkaňô ali'M taLciFsoMtêsoM》』（1939年）である。おのおののタイトルに現れる，「カイン（kayin)」と「クゥイン（kùyin)」はビルマ語での他称，「プアカニョウ《pgaMkaňô》」はスゴー・カレン語での自称と一般的には考えられる語で，前２者は仏教，後者はキリスト教の立場からカレンの歴史が叙述されている。本稿では，従来まったく研究対象にされてこなかったこれらカレン史３書のうち，仏教徒著者による２書を扱う。

仏教徒著者による２書を検討の中心的対象とする意義は，ひとえに，東南アジア大陸部の近現代史において一定の政治的・社会的・文化的存在感を示してきたカレンという民族集団のうち，多数派を占める仏教徒の存在様態がほとんど明らかにされてこなかった，という点に存する。一般にキリスト教徒カレン

のビルマ植民地期の史料は豊富で，それらに基づいてこの人々についての記述がなされてきたし，あるいはそのキリスト教徒をもってビルマ植民地期の「カレン」が代表させられてきた。しかし，仏教を信仰するカレンについてはどうであったろうか。たしかに19世紀から，東部山地では仏教的要素を抱えたカレンのカルト的宗教運動が，そしてその南のパアン平野では今日のカレン仏教の中心としての位置付けに連なるカレンの仏教徒の存在が，それぞれに確認できる。さらに大きな仏教徒カレンの人口が，デルタやペグー管区，テナセリム地方など下ビルマ一帯に居住してきた。1931年の国勢調査［1931 Census］によれば，仏教徒はカレン総人口の８割ちかくいるとされる。しかしこのような仏教徒については，そのような人々がいるとは誰もが知るところであったのにもかかわらず，具体的にそれが誰であり，どのような生活様態を持っていたかなどなど記されることはなく，また自らもカレンをよりどころとした主張の記録をほとんど残してこなかった。この文脈で見れば，つまり，1929年の『カイン王統史』と1931年の『クゥイン御年代記』とは，植民地ビルマ社会で仏教徒カレンがはじめてカレン「民族」として社会的な自己表明を行った記録であったという点で特異である。

では，このウー・ピンニャとウー・ソオの２書では，カレンについての何が主張されているのか。そのような主張は，どのような根拠や論理で支えられているのか。それはカレン民族独自のもので，ビルマ民族のそれとは截然と異なるのか。さらにそれらは，キリスト教徒カレンの主張してきた「カレン」とは異なるものであるのか。そうであるなら，どのような異同があるのか。これら諸々の問いかけは，やがて，植民地ビルマ社会における仏教徒カレンの民族意識のありかた，その顕在化過程に関する疑問に逢着する。つまり，キリスト教徒カレンの存在を以って「カレン」一般が語られてきたことへの反省的考察につながることになる。さらに，植民地化がもたらした近代の相のもとでのビルマにおける民族範疇の形成という，従来論じられてきた上からの民族形成論に

対して，その民族意識の下からの湧出過程の省察へと連なることになろう。

このような射程を意識しながら，本稿ではまず，この２書についての基礎的条件の解明を主題としたい。すなわち，まず，19世紀からのキリスト教化されたカレンについて概観して，従来判明しているカレンのなかにおける仏教ということを位置付ける（第１章）。そのうえで，２書を著したふたりの人物の背景を検討し（第２章），２書の主張（第３章）と，その主張を底支えしている論理構造の特徴を明らかにする（第４章）。キリスト教徒著者ソオ・アウンフラの著書に関する検討は別稿を期する予定であるが，比較が有効であると思われる点については必要に応じて本稿でも言及することにする。

図１　カレン関係地名図（下ビルマ）

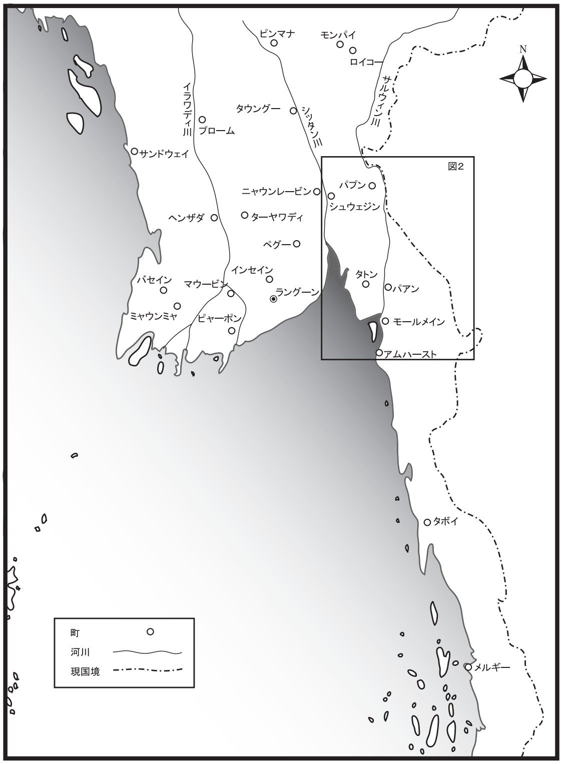
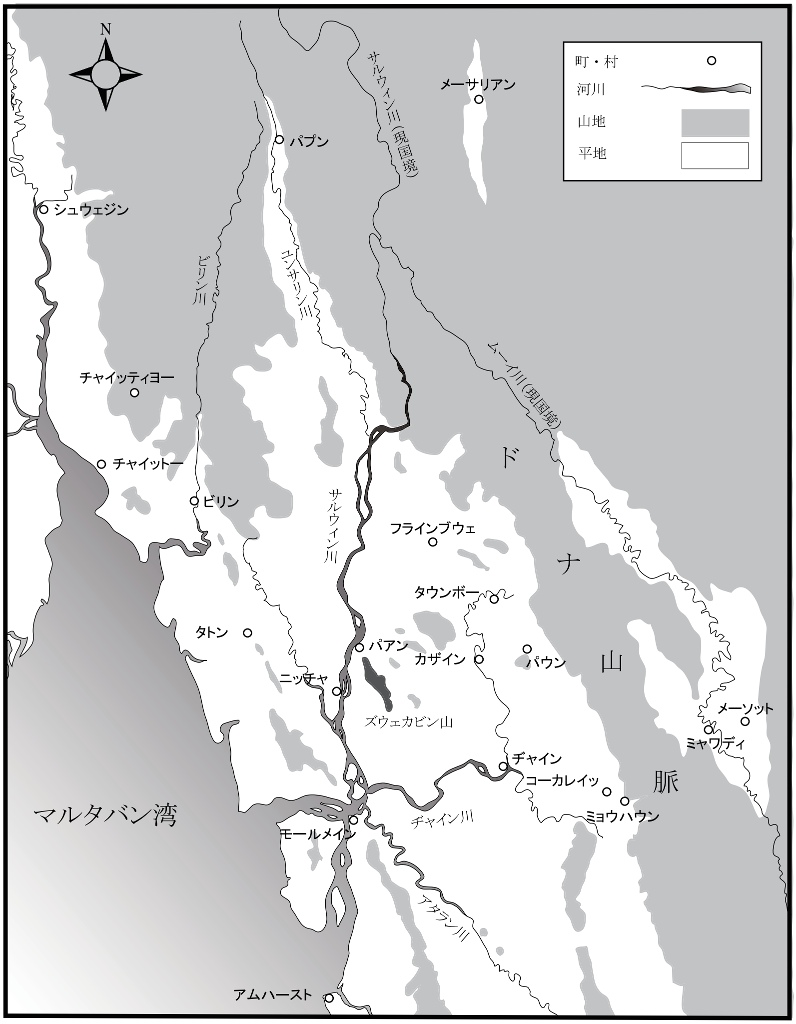


図２　カレン関係地名図（東部地域）



第１章　カレンにおける仏教

カレンと呼ばれる人々のうち少なからぬ部分が18世紀には仏教を受容していたらしい。18世紀末に英東インド会社からアヴァ王廷へ使節として派遣されたサイムズ（Michael Symes）の見聞にも，「カレンの間の仏教の知識」［Symes 1827: 243］についての記載がある。19世紀に入ると，こういったカレンのなかの仏教が米人バプティスト宣教師の視界のなかに捕捉され，とくに初期宣教の記録に書きとめられるようになった。しかし19世紀からの「カレン」といえば一般に，このバプティスト宣教師によってキリスト教化されたカレンであり，「カレンの歴史」とは，植民地ビルマ社会に濃厚な印象を刻印してきたこのキリスト教化されたカレンの記録をたどることが意味されてきた。以下ではまず，この19世紀以来のキリスト教徒カレンについて概観し，同じ時期の仏教徒カレンについて分かっていることを整理してみたい。

第１節　カレンとキリスト教

前述のようにビルマにおけるカレンは，植民地期末期のセンサス［1931 Census］ではビルマ民族に次いで136万人（総人口に占める割合は9.3%）の人口規模がある。おもな居住地域である下ビルマに限ると，総人口に占める割合は２割近くになり，しかもほかのビルマの主だった民族が自らの歴史的故地といえる土地に集住しているのに対して，カレンの多くはビルマ民族と混住している点で特異である。

カレンを構成するとされるサブグループの分類は，おもに言語上の区分に拠っている。最大のサブグループとしては，スゴーとポーがほぼ同数の人口を擁して全カレンの７割以上を占め，おもに西部のイラワディ川デルタ地方から

東部のビルマ＝タイ国境部の山地にいたる，下ビルマの広範な地域に居住する。ほかにも東部を中心としてカヤー，パオ，ブゲェー，パダウンなど，計40以上のサブグループが存在するとされる。宗教的には仏教徒が８割近く，キリスト教徒は１～２割程度，そして若干の精霊信仰者がいるとされ，とくにスゴーにおけるバプティスト派やカヤーにおけるカトリックなどのキリスト教徒は，数は少ないものの存在感がある。そして，このようなスゴーのバプティストを核として「キリスト教徒」や「親英」，戦後の民族問題の文脈では「叛徒」や「分離主義者」という印象が深められていった。では，このような印象や理解はどのようにかたちづくられていったのか。

カレンによる大規模なキリスト教受容は，バプティスト派の米人宣教師ジャドソン（Adoniram Judson）が，来緬15年目の1828年に得た最初のカレン改宗者コー・タービュー（Ko Tha Byu）に始まるとされる。ビルマはその２年前に終結した第１次英緬戦争の結果，南部のアラカン（Arakan）とテナセリム（Tenasserim）地方が英国に割譲され，米人宣教師らはラングーン（Rangoon）からテナセリムのアムハースト（Amherst）に活動拠点を移していた。そして，コー・タービューを起点にしてカレンの間にキリスト教が爆発的に広まった。宣教師らは当初，すでに彼らに馴染みの深かったビルマ語を仲介手段として，カレンらにビルマ語を教えた上で宣教活動を展開することを考えていた。しかし，カレンによるキリスト教の大規模受容のきっかけとなった「失われた本」に関するカレンの伝承(3)に行き当たり，最初期の宣教師のひとりウェイド（Jonathan Wade）がビルマ語の字母体系を改変して1832年，スゴー文字を考案した。ポー文字もまた1830年代にウェイドによって発案されたが，その方言差(4)のゆえに1852年になるまで正書法の確立は遅れた。スゴーとポーという２系統の正書法の確立過程はすなわち，カレンという民族を構成すべき２大要素としてスゴーとポーという下位語族があるという観念が，認識論的に確立していった過程であった。それとともに多様な偏差を含んでまとまりのなかった言

葉のひろがりに「カレン語」という名称があらためて確認され，その偏差のある部分を方言と定義しうる中心がモールメイン地方のカレン語におおむね設定され，そしてカレン語の外郭が基本的に画定されることになる。

カレン文字が試行錯誤を重ねながら策定されつつ，カレン諸語を話す人々に固有の特徴，カレンという民族に内包され満たされるべき知識は蓄積・編集・体系化され，印刷・出版というテクノロジーによって斉一的に再生産・頒布・共有され，教育の場を通してその民族意識は平準化していき，そして総体としてカレンは，ある方向性をもった民族として彫りこまれ立ち上がっていった。まずもってカレン宣教に関わる出版物は，膨大である。本国宣教団本部からは宣教雑誌や年次報告書，一般の出版社から宣教師の伝記やメモワール，地域拠点別の宣教史などが英語で発刊され，学界研究誌にカレンに関する論文がおおく掲載され，あるいは本国神学校や大学機関に学位論文が提出された。モールメイン（Maulmain）やタボイ（Tavoy），のちにラングーンやバセイン（Bassein）の教団印刷局では主にカレン語による教育・宗教関連の教科書や読本，月刊・季刊誌の定期刊行物が刷られた。宣教における人的・経済的・時間的資源の最も大きな部分がこの事業に投入されてきたのは容易に見て取れるところであり，書籍の編纂と出版，そこから生まれた聖書や宗教的印刷物による教化，そして文字教本や数学・地理・科学などの教科書による教育を通した宣教の営為こそが，バプティストの活動の核心であった[(5)]。また，学校は教会とともに当初からカレン宣教の両輪のひとつであった。19世紀半ばまでにはモールメインのカレン神学学校を頂点として，各宣教拠点の師範学校，そして初等教育を施す村落学校という三層構造のヒエラルキーが完成していた。1852年の第２次英緬戦争によって下ビルマ全域が英領化されたのち，カレン宣教はラングーンとタウングー（Toungoo），デルタ地方に拡大し，バプティストの最高学府はラングーンに置かれて，バプティスト・カレンのあいだにおける教育機会は植民地ビルマの平均よりも質・量ともに充実していった。とくにデルタの

コミュニティは急速に発展しテナセリムをしのいで，自他共にバプティスト・カレンの本拠地との認知を得るまでに成長した。

19世紀を通して米人バプティストがカレンについての民族誌・言語誌的な知識を蓄積していったとすれば，植民地ビルマ大の範囲で人口学的・言語分類上の統計学的データをその知識に付け加えていったのは，19世紀末から20世紀にかけての英国植民地主義者たちであった(6)。1886年に第３次英緬戦争の結果としてビルマ全土が英領化したのち，ことに地租査定を念頭にした植民地経営上の基本的政策策定のため，各地方やその住民についての情報収集の活動は本格化し，人口調査や言語調査，その他の諸種の社会統計調査がこと細かに実施された。その結果，この地に住むカレンの勢力や分類が具体的数字を伴って表現されていくことになった。たとえば1931年センサスで明らかにされたバプティスト・カレンは，「カレン全体」の12.35%（キリスト教徒カレンは15.99%）であり，カレン内の宗教人口別の最大多数は76.74％の仏教徒であった。しかし地誌（gazetteer）や民族誌においても，これら仏教徒はどのような人々であったか，どのような生活様態を持っていたのかなど言及されることはほとんどなかった。むしろ「山岳民族」というイメージに迎合しやすい，しかし統計上は7.23％というキリスト教徒よりも小さい割合の「精霊信仰者（アニミスト）」のカレンが好んで取り上げられるのが普通で，最大多数者としての「仏教徒カレン」は，民族誌的細部が欠落した存在であった。

米人宣教師に教化され英人植民地主義者の支配を受容したキリスト教徒カレンらが，自らを民族として社会的に自己主張しはじめたのは，植民地ビルマにおける他のどの民族よりも早かった。ビルマ民族主義運動の起点と一般に評される1906年の青年仏教徒連盟（YMBA）の設立に先立つこと四半世紀，1881年にバプティストらが英人の支援のもとカレン民族協会（Karen National Association: KNA）を創設している。20世紀に入るとキリスト教徒カレンの政治家らは，植民地ビルマの自治拡大につながる諸改革の場や植民地議会で親英

的な立場を取り，ビルマ・ナショナリストの反発を受けた。植民地軍でもキリスト教徒カレンが多く登用され，19世紀より何度かの波を形成して起こった農民反乱や反政庁武装蜂起で，カレン兵を含む植民地軍が鎮圧部隊としてたびたび派兵された。こういった動向はビルマ・ナショナリストの新聞メディアに批判的に取り上げられていった。このようにして1920年代には，カレンのなかのキリスト教徒の存在感はきわめて大きなものであって，カレンは植民地体制の恩恵を受ける「政庁協力民族」であるというイメージは，すでに抜き差しならぬほどにビルマ社会に浸透していた。

このようにして，植民地体制がビルマにおいて終焉を迎える1940年代までに，ビルマのカレンにかかわる資史料は，キリスト教宣教師と英人植民地主義者によるもの，キリスト教徒カレン自身によるもの，そういったカレンに反発したビルマ・ナショナリスト側によるものが，膨大に積み上げられていった。次いで，米人バプティスト宣教師と英人官僚という，従来カレンを直接的見聞のもとに宣教の対象，統治の対象として描いてきたカレンの二大記述者が，ビルマの独立によってビルマという地域から，カレンの元から去っていった。戦後ながらく国を閉ざすことになるビルマのカレンを離れたところから叙述しようするものにとって，更新されることのなくなったこれらの資史料は「植民地期のカレン」を証言する記録として重宝されることになる。そしてカレンの何を描くにしてもまずはこれらの資史料群を参照し，多くは「親英的」「キリスト教徒」という民族観に強く拘束されることになった。独立ビルマにおける国民国家の形成過程と，そこに噴出することになる民族を理由とした政治問題に関心が示されると，とくに苛烈を極めて長期に渡っているカレン民族問題の歴史的要因として，かような「親英的」で「キリスト教徒」という側面が容易に引き合いに出され，「叛徒」や「分離主義者」という評価に歴史的根拠を供することになった。戦後に出版された，こういったバプティストと英人植民地主義者の資史料群をもとにした二次研究［例えばSilverstein 1960（1980）; 飯

島 1967; Steinberg 1984; Brown 1994など］においては多く，カレンについての情報上・理解上の制約が「カレンとはキリスト教徒である」という断定に短絡し，カレン＝ビルマ民族間の確執という現状が，植民地期のバプティスト宣教と植民地体制下の分割統治政策に原因があると単線的に遡及され理解されている。そこに欠落しているのは，戦後のカレン民族運動に多くの仏教徒が参加していることを当然視しない問題意識であり，これら仏教徒がキリスト教徒と運動を分有することになった経緯，したがって彼らが「カレン」意識を養成した歴史的過程に関する，予断を排した疑問である。

植民地期の「カレン」に関する知は，出版という表象経路のヘゲモニーを占有しつつ，米人バプティスト宣教師と英人植民地主義者というエージェントに寄り添いつつ表象されてきた。そこに「多数派」を占めるとされる植民地期の「仏教徒カレン」に関する知識を付け加えることができれば，「キリスト教徒」は当然として「親英」，そして戦後の「叛徒」や「分離主義者」としてのカレンのイメージも修正を迫られることになろう。では，戦後の現代ビルマ世界のなかで明らかな「仏教徒カレン」はどのように語られ，それはどこまで時代を遡上することができるのか。

第２節　民間民族誌における歴史叙述

仏教徒のカレンについては戦後，とくに東部のパアン地方のカレン仏教に材を取ったビルマ語の著作物が数多く出版されてきた。例えば，マン・リンミャッチョウとマン・ティンナウンはともに著名なポー作家で，前者には『カイン文化の記録』［Lin Myat Kyaw 1970］や『カイン慣習文化の集成』［1980］，後者には『東ポー・カイン』［Thin Naung 1978］，『カイン州の美』［1981］，『パアン市』［1984］などの著作がある。最近のものでは，ソオ・アウンチェインの『原民族カインの歴史･文化とカイン州小史』［Aung Chain 2003］がある。また，

この地方の仏塔寺院縁起も多く見られ，カレンの聖山ズウェカビンにゆかりのある寺院･仏塔に関しては『ズウェカビン仏塔縁起』［Loung Khin 1965］や『ズウェカビン寺院新史』［Zagara 1966］が代表的である(7)。いずれにせよ，こういった著述は1960年代以降に印刷されたものであり，これ以前に遡ると仏教徒カレンに関する出版物を見出すことは，極端に難しくなる。

　このようなカレンの仏教に関する民間の民族誌のなかで，1960年代をさかのぼって植民地期に出版時期を見出すことのできる例外的な著作物が，カレンの歴史に関するものである。それらは，内容を検討してみるとおおよそ２種類の系統に分類でき，キリスト教徒カレンの１種を含めると合計３種の系譜が確認できる【表１参照】。第１は，初版が1929年という早い時期に出版されたウー・ピンニャによる『カイン王統史』［Pyinnya1929］の系統であり，戦後になってから，僧侶のオーバータ師はこれを底本に『カイン王統史』［Obatha 1961］を自らの著書として出版し(8)，ピンニャトゥータ師はその抄本として『カイン民族と仏教文化王統史抄』［Pyinnya Thuta 1961］を編纂，さらに1965年にはオリジナルの再版［Pyinnya 1965］が出されている。第２のものは，原著がやはり1931年という早い時期にウー・ソオによって出版された『クゥイン御年代記』［Saw 1931］で，1963（1964）年にこれを底本にしたトゥウェイッザーダラ師による『カイン王統記』［Thuweizadara 1963］，1960年代にトゥンインによって『クゥイン年代記抄』［Tun Yin n.p.］が出版されたことが，いまのところ確認されている。以上ふたつの系統はいずれもビルマ語で書かれていて，互いに近接した時期の出版ながら，後者は前者を引用せず，描かれているカレンの歴史の様相もたがいにまったく異なっている。あらためて強調すれば，この２書の初版出版年の1929年と1931年というのは，仏教徒カレン著者による出版物としては最初期にあたり，これを遡っては他に類書や仏教徒カレンについての出版物はほとんど見当たらない。

表１　カレン史の諸版

	①題名（日本語訳） ②題名（翻字/慣行表記） ③題名（原書） ④副題名（原書）	出版年月日 （執筆年）	系統（版）	著者／編者	出版地／出版社 （執筆地）	言語	備考
1	①カイン王統史 ②kayin yazawin ③ကရင်ရာဇဝင် ④The Karen History	Oct. 1929 ၁၂၉၁ သီတင်းကျွတ်လ	Aオリジナル（初版）	ウー・ピンニャ Pyinnya, U ပညာ ၊ ဦး	ラングーン／トゥーリヤ社 သူရိယသတင်းစာတိုက်လီမိတက် （タトン）	ビルマ語	
2	①クゥイン御年代記 ②kùyin maha yazawin dojî ③ကုရင်မဟာရာဇဝင်တော်ကြီး	Feb/Mar 1931 ၁၂၉၂ တပေါင်းလ	Bオリジナル（初版）	ウー・ソオ Saw, U စော ၊ ဦး	ラングーン／国民文学社 အမျိုးသားစာပုံနှိပ်တိုက် （ラングーン）	ビルマ語	
3	①プアカニョウの歴史 ②pgaMkaňô ali'M taLciFsoMtêsoM ③ပှၤကညီအလံာ်တၢ်စံၣ်စိၤတဲစိၤ ④The Karen History	Apr 1939 ၂၆၇၈ လါချံ	Cオリジナル（初版）	ソオ・アウンフラ Aung Hla, Saw အီၣ်လး၊ စီၤ	バセイン／ カレン・マガジン・プレス Karen Magazine Press （ラングーン）	スゴー語	
4	①スラパットゥータリンガ ②Slapatthutalinga ③သ္ဂပတ်သုတလင်္ကာ	（1942）	A系？-peza (manuscript)	ウー・パーラマ Parama, U ပရမ ၊ ဦး	（パアン）	東ポー語	［Hpoun Myint 1975: 187］の摘要からはウー・ピンニャ著書が基本資料となっているものと推測される
5	①スラパットゥータリンガ ②Slapatthutalinga ③သ္ဂပတ်သုတလင်္ကာ	1957	A系？－初版	ウー・パーラマ Parama, U ပရမ ၊ ဦး	ラングーン？／ミョウメイッ社 မြို့မိတ်ပုံနှိပ်တိုက် （パアン）	東ポー語、ビルマ語	1942年にペーザーとして執筆
6	①クゥイン年代記抄 ②kùyin yazawin acînjou' ③ကုရင်ရာဇဝင်အကျဉ်းချုပ်	1960's?	B系	マン・トゥンイン Tun Yin, Mahn ထွန်းရင် ၊ မန်း	ラングーン？／n.p. （ラングーンあるいはマウービン）	ビルマ語	マン・トゥンインは植民地期の植民地議会、独立交渉期の制憲議会、独立後の議会下院の議員を歴任
7	①カイン王統史 ②kayin yazawin ③ကရင်ရာဇဝင်	Jul 1961 ၁၃၂၄ ဒုတိယဝါဆိုလ	A系	ウー・オーバータ（編） Obatha, U ဩဘာသ ၊ ဦး (Pyinnya, U ပညာ ၊ ဦး) (Parama, U ပရမ ၊ ဦး)	モールメイン／フリャッシッ社 လှျပ်စစ်ပုံနှိပ်တိုက်	ビルマ語	最末尾の2ページ分の記述がウー・ピンニャの原著と異なる。おそらく編纂の底本とした原著最終紙片（177－178ページ）が紛失し、ウー・オーバータが独自に書き足したものと思われる。1929年版の再版とも言及せず、ウー・ピンニャとウー・パーラマをあたかも共同執筆者のような形で表現。
8	①カイン民族と仏教文化王統史抄 ②kayin lumyôu hnîn bou'dà yincêhmu yazawin acînjou' ③ကရင်လူမျိုးနှင်ဗုဒ္ဓယဉ်ကျေးမှု ရာဇဝင်အကျဉ်းချုပ်	21 Dec 1961 ၁၃၂၃ နတ်တော်လဆန်း (၁၃)ရက်	A系	ウー・ピンニャトゥータ Pyinnya Thuta, U ပညာသုတ ၊ ဦး	ラングーン／ ミーターミッターシュウェズィ社 မိဘမေတ္တာရွှေဆိပ်ပုံနှိပ်တိုက် (ပုသိမ်ခရိုင် ကံကြီးဒေါင့်မြို့ သီရိမင်္ဂလာရာမကျောင်းတိုက် バセイン近郊)	ビルマ語	
9	①カイン王統史 ②kayin yazawin ③ကရင်ရာဇဝင် ④The Karen History	Dec 1963? Jan 1964? ၁၂၉၁ သီတင်းကျွတ်လ	B系	アシン・トゥウェイッザーダラ Thuweizadara, Ashin ပသုဝိဇ္ဇာဓရ ၊ အရှင်	ラングーン／ テッルーゲー・サーペー社 တက်လူငယ်စာပေ ခေတ္တကွမ်းခြံကုန်မြို့နယ် ၊ တောင်ကျောင်းကျေးရွာ ၊ ရွှေသဃ်နန်းငူကျောင်း （デーダイェー近在）	ビルマ語	
10	①カイン王統史 ②kayin yazawin ③ကရင်ရာဇဝင်	Feb 1965 ၁၈–ကြိမ် ပြည်ထောင်စုနေ့	A（2版）	ウー・ピンニャ Pyinnya, U ပညာ ၊ ဦး	ラングーン／ ズウェサーペー社 ဇွဲ–စာပေရိပ်မြုံ	ビルマ語	1929年版の第2版と記載
11	①カインの起源 ②kayin î mulàzi'myi' ③ကရင်၏မူလဇစ်မြစ် ပထမပိုင်း ④The Roots of Karen, Part 1	14 Jan, 1983 ၂၇၂၂ ကရင်အမျိုးသားနှစ်သစ်ကူးပွဲတော်နေ့	C系	トラ・ソオ・ポー Paw, Thra Saw ဖော ၊ သရာစော	ラングーン／ カイン民族新年祭開催委員会 (၂၇၂၂ ခနှစ် ကရင်အမျိုးသားနှစ်သစ်ကူး ပွဲတော်ကျင်းပရေးဗဟိုကော်မတီ)	ビルマ語	1983年カレン新年の記念出版物
12	①スラパットゥータリンガ ②Slapatthutalinga ③သ္ဂပတ်သုတလင်္ကာ	2002	A系？－2版	ウー・パーラマ Parama, U ပရမ ၊ ဦး	ラングーン：n.p. မြို့မိတ်ပုံနှိပ်တိုက် (Paan, Thaton Dist.)	東ポー語、ビルマ語	1942年にペーザーとして執筆

これら２つにたいして，第３のものはキリスト教のカレン史である。筆者が現在までに見出したこの系統の出版物は，1983年１月14日のカレン正月を記念して配布された『カインの起源』［Paw 1983］があり，これはビルマ語で出版されている。しかし，大方は，現在のミャンマー国内やタイ側において原著からのコピー製本やワープロ打ちで複製されて流通していて，ミャンマー国内で出回っている場合には検閲当局の許可を得ずに地下出版されているものばかりである。原著はスゴー・カレン語でソオ・アウンフラによって書かれた，1939年出版の『プアカニョウの歴史』［Saw Aung Hla 1939］である。

つまりは，カレンの歴史と銘打った当事者のカレンによる現地語の書物には３種類があり，うち２種類は仏教徒著者，のこり１種類がキリスト教徒著者によるもので，オリジナルは1929年から1939年という植民地期末期の10年間に出版されたものである。これらの書物に対する研究者の引用・言及は，わずかである。例えば，ケーニッヒがフットノートでウー・ピンニャ著書の存在のみに言及しているが［Koenig 1990: 267］，それはまだましで，タントゥンはウー・ソオのカレン史を否定的に却下し［Than Tun 2001: 76］，レナードはソオ・アウンフラ著書を「問題の多い」歴史書と切り捨てている［Renard 1980: 42］。たしかに「史実に基づいたカレンの歴史」を求めるならば，これらの著書に得るものはさほど多くはあるまい。しかし，これら２つの仏教徒カレン史は，仏教徒を自覚するカレンによるはじめての名乗りの記録として重大な意味を持つ。当のカレン人のあいだから初めてのカレン史書が，しかも仏教徒とキリスト教徒によって，植民地期末期の10年という短い期間に出版されているとすれば，そこに表明されている歴史観がいかなるものであって，その出版を促した環境と動機がどのようなものであったのかということは，是非ともに問われなければならないことになろう。では，当のカレンが残した出版物に限らずとも，植民地期におけるカレンの仏教に言及するような記録はどのようなものがあるのであろうか。そしてそれは，２つの仏教カレン史の背後にいるような仏教徒

のカレンらにどのように接続しるのか。

第３節　ふたつの仏教

植民地期までのカレンにおける仏教といえば，おおよそ２つの系統の議論がなされてきた。東部山岳地域を中心としたカルト的な宗教運動における仏教的特質と，その南のパアン地方を核心域として都市周辺部と後背地に展開してよりビルマ的な仏教世界にかかわりを持ったカレン仏教，のふたつである。

まず前者に関しては，戦後，参与観察が不可能になったビルマのカレンに替わってタイ・カレンを対象とした人類学者の関心から派生して，王都から同心円状に拡散してゆくビルマ語世界の視点に対して，カレンをむしろビルマやタイ，北タイの諸王朝のいずれの中心からも遠く離れた周縁的な存在として規定してきた(9)。そして，19世紀におけるカレン仏教徒がどのような人々であったのかという問いをこの宗教運動に差し向けたとたんに，カレンにおける「仏教徒」という主体規定は，これらの研究が明らかにしえた19世紀のカレンの宗教運動の多様性に直面して動揺することは認めなければならない。そこでは，上座仏教の信仰がカレン固有のユワ神への信仰などと結びつく，未来仏を名乗る預言者を中心とした宗教運動を営む，ミンラウン（未来王）を僭称するリーダーを擁して仏教的な千年王国運動を形成する，そのある部分は当時教勢を伸張していたバプティスト派キリスト教を受容する，またはそれと混淆してあらたなカルト的宗教運動を展開する，など多彩な内実が観察される。

ジャドソンやボードマン（George D. Boardman），ウェイド，メイソンといった初期のバプティスト宣教師は，東部山岳地域のカレン宣教の過程であまたの宗教者とその運動に遭遇し見聞を残してきた。例えば1832年の米国宣教本部へのジャドソンの報告書のなかで，ユンサリン川沿いのカレンが宣教師たちに「キリスト教の教えを請う」手紙を送ってよこしたことが記されている。こ

のカレンのグループは「アリマディ（Areemady, Aremetteya 未来仏）」と呼ばれるカレンの「預言者」をリーダーとしていたが，彼らは明らかに仏教的な信仰の特徴を有していた。この前後から宣教師たちは，関心をもってこのような多くのカレン・カルトに接触していったことが記録されている。第二次英緬戦争後の1856年には，ユンサリン川流域を拠点としたミンラウンを自称する指導者のもとのカレン「反乱」が英国植民地軍によって鎮圧されている。この運動は西部デルタのバセインや東部モールメイン近郊のカレンにも呼応を持ったようである。このようなカレンにおける千年王国運動はこの折に断絶したわけではなく，1860年代以降，現代まで存続するレーケー（Leke，パアン地方のニッチャ Hnitkya村で1860年開始），テラコン（Telakon，同じ頃にチャインKyaingあるいはGyaingで開始）(10)，そしてプー・パイッサン（Phu Paik San，1866年）などに代表される宗教運動に連なっていった［Stern 1968: 306-308; Gravers 2001: 11-12; Hayami 2004: 177-184; 速水 2004: 226-229; NAD: 1/1(A) 181 “Karen Minlaung in Yunzalin”］。

他方，都市周辺部とその後背地における19世紀のカレン仏教徒の動向は，王都に中心をもつよりオーソドックスなビルマ仏教とのつながりの上で把握ができる。現在，カレン仏教の中心地は東部パアン地方に存するものとされ，とくにポー・カレンの存在感が大きいが，スゴーの僧院も散見される。「ポー・カレン・サンガ」［Womack 2005: 127］とも形容されるその仏教は，往々にして18世紀の伝説的なポー・カレン僧プー・タマイッ（Phu Ta Maik）と彼が考案したというポー・カレン文字（仏教ポー・カレン文字）(11)の体系に起源が帰せられる。プー・タマイッの生い立ちについては諸説ある。パアン南方のチャイン近郊で生まれ，若くして僧侶になることを志したが，彼がカレンであるために仏門に入ることは許されなかったという。だが，アヴァでビルマ王に格別の許可を得てようやくに羅漢に叙せられた。1750年，1776年，1787年（あるいは19世紀半ば）とも伝えられるころに彼は出身地に戻り僧院を開いた。プー・

タマイッの文字は周囲のポー・カレン僧院に広まり，カレンの聖山ズウェカビン山頂にポー僧ヤウン師（U Yaung）によって1850年に開基されたイェタグン（Yetagun）僧院は，この文字普及の中心的存在となっていった［*ibid*.: 130-146］。

ポーンミンが1960年代後半までにこの地方の僧院をめぐり，75包のポー・カレン語貝葉文書を収集して『仏教徒ポー・カレンの貝葉文書の歴史（*bou'dabatha pôukayin peiza thamâin*）』［Hpoun Myint 1975］という，ビルマ語ではほとんど唯一の仏教徒カレンに関する本格的研究書を出版している(12)。研究の本論は，収集された75包の貝葉の執筆年代，執筆者，内容分類などの分類［*ibid*.: 1-202］と，ポー・カレン語貝葉文書の編纂史［*ibid*.: 203-244］という構成になっている。貝葉中もっとも古いものは1851年の年号を持つもので，19世紀のものは26包ある。内容としては経典翻訳やその注釈書など宗教的なもの（lôkou'tara）が52包，占星術や星宿，釈迦本生譚，説話，物語，歴史(13)などの世俗的なもの（lôkî）が25包であり，重複がある。ほとんどの貝葉が他言語に原典があり，ポー語に翻訳されたものである。最も多いのがモン語の36包，ついでビルマ語21包，パーリ語４包などとなっている。執筆者としては24坊の僧侶が判明していて，ビルマ世界によくあるパーリ語系の僧号が並んでいる。しかし，この研究の中では75包の貝葉とプー・タマイッによるポー文字のつながりは言及されておらず，ウォーマックが他のビルマ側のサンガ史料や民間の伝承を素材とした戦後の書物から系譜を推測している［Womack 2005: 128-135］。イェタグン僧院の創堂以来，この僧院を中心として1920年までにはパアン地方の13の僧院でポー語貝葉文書が生産されるまでに広がっていたという。ポーンミンは，ポー語で貝葉を書いた僧侶らを，1851年から1920年の範囲で３世代に分類しており，第１世代では仏法の信奉とカレンの伝統への尊崇が保たれ，第２世代ではモン語からの翻訳が盛んになり，第３世代でポー・カレン独自の貝葉が編纂され始めたとする［Hpoun Myint 1975: 212-220］。

このような東部パアン地方でのポー・カレン語貝葉文書執筆の歴史が，カレンという社会的ふくらみをもつ民族意識のより大きな広がりのなかでどのような位置を占め，どのような意義を持ったのかを評価する作業は，まだ今後の課題として残される。貝葉生産に必要な高い専門性，わけてもモン語・ビルマ語・パーリ語等の識字能力，ポー文字の執筆能力という条件を考えれば，当然，そこに関わっていたのは僧侶という一握りの知識人だけであった。だが，これらの僧侶はおのおのの村落共同体のなかで欠かすことの出来ない僧院という場で，村人の信頼と尊敬を集めてそのような貝葉生産を行っていた。その僧と村人のあいだで共有されていたなにものかを，「仏教」と「カレン」とに分けて論ずることはおそらく意味のあることではあるまい。問題は，19世紀から20世紀にかけてこのパアン地方で，いかに後者の「カレン」という表出が強まり，やがては今日の「(ポー) カレン仏教」の中心地という位置付け，そのかぎりでウォーマックのいう「ポー・カレン・サンガ」なる状況が析出されてきたかということであろう。この過程解明は，(ポー・) カレン・ナショナリズムのイディオムに彩られて再生産されている，現在のプー・タマイッ伝説の生成過程を明らかにすることにも繋がるはずである。実際に彼が考案したといわれる文字を使用して行われた19世紀のポー・カレン語の著述活動に，民族主義的な発露はほとんど見られないならば，むしろ，仏教という普遍原理にポー・カレン語話者を接続させることが志向されていた，と評価ができるかもしれない。

いずれにせよ以上のように，第１の山地における周縁的なカレンの宗教運動も，同時期の平地のビルマ民族による仏教千年王国運動の影響をいくばくか受けていたことは，ミンラウン（未来王）やパヤーラウン（未来仏）という象徴がその運動の重要な位置を占めていたことからも推論できる。しかし，この系譜上にウー・ピンニャやウー・ソオのカレン史があるとは思えない。対して，第２の都市後背地としてのパアン地方に中心をもつカレンの仏教の展開はより

直接的にビルマ仏教に関わりをもっていたし，そして何よりも，以下に述べるようにウー・ピンニャは実際にこの土地を往来し，その『カイン王統史』の舞台として描いた。

第２章　著者の背景

先行研究が明らかにしてきたカレンにおけるふたつの仏教のあり方について瞥見してきた。では，２人の仏教徒著者は，このようなカレン仏教の流れやビルマの仏教にどのようにつながっていたのか。そして各々のカレン史書の背景には，どのような環境があったのか。以下ではウー・ピンニャとウー・ソオによる２つのカレン史叙述を可能にしてきた筆者自身の背景，執筆の際に参照された文献類，そして彼らにとってカレン史を構成する際に範となりえた歴史の叙述スタイルについて検討する。

第１節　ウー・ピンニャの背景

ウー・ピンニャ個人に関しては，ごくわずかのことしか分かっていない。間違いなく仏教徒ではありおそらく1860年代に生まれ(14)，ビルマ東南部のタトン（Thaton）周辺で活動しておりこの著書が出版されたときにはある程度の名のある作家であったらしい。他にも『タトン王統記集成』［Pyinnya 1926］や『シュウェモオドオ仏塔縁起』(15)などを著した。前者はモンの王統記を主たる史料として書かれ，後者は今日でもタトンで有名な仏塔の歴史を題材としている。シュウェモオドオに詣でる参拝客はなにもパオやカレンに限られるわけでもなく，ビルマ各地に無数とあるほかのパゴダ同様，そこには民族を問わない仏教徒が訪れる。つまりは，ウー・ピンニャが「カイン王統史」の他に著したこの２書には，多少の民族色は表れようが，ビルマにおけるごく普通の仏教

徒の信仰心が表現されていて，そのかぎりでウー・ピンニャは旧王都に中心を持つビルマの仏教圏内で活動していたことがうかがわれるのである。

ウー・ピンニャの本名はウー・ミャッマウン（U Myat Maung）というビルマ風の名前であったらしく，同名が多いビルマではよくされるように，出身地名を冠してタトン・ウー・ミャッマウンと称している新聞記事［TD 1929 4/13］が残されている。しかし今日のビルマでもごく普通の習慣からして，名前のみでビルマ民族か他の民族である否かは判断できない。カレンでもシャンでもビルマ風の名前がつけられることはよくあることである。それでも，著書の内容と主張からは彼がポー，スゴー，パオなど，言語学的には総計40ちかくあるとされるカレン系のサブグループのいずれかに属していたと考えるのが妥当であろう。「ピンニャ」は「般若」を意味するビルマではよくあるパーリ語の僧号であるが，『カイン王統史』を出版したときには僧籍になかった。還俗した後に僧号を称し続ける習慣はパオにあり，あるいはウー・ピンニャもパオであったかもしれない。

タトンはラングーンの南東に位置し，モンの王朝がかつて王都を構え，1057年のパガン朝の王アノーヤター（Anawyatha）による侵出まではビルマで随一の仏教文化が栄えた土地であるとされる。通常のビルマ王朝史では，セイロン（スリランカ）から上座仏教がビルマの地に伝来した際の窓口になったといわれる。ここに拠点をもったモン仏教もビルマ仏教史でもとりわけ権威のある地位を与えられ，いわばビルマ仏教の兄貴分のような扱いを受けている。

タトンはまた，カレン語系の言葉を話すパオ民族の町でもある。パオはかたや北方の現シャン州南部に大きな集住地を持ち，シッタン河の河谷平野に点在するパオの村々の細い帯状の分布域をたどって南下すれば，タトン周辺でふたたびいまひとつの濃密なパオの土地にゆきあたる。パオはその人口(16)の大部分が仏教徒であり，同じ土地のモン人，ポーやスゴー・カレンの仏教徒と密な隣人関係を築いてきた。とくに植民地化以後，スゴーやポーとは同じ言語系統

に分類され，独立交渉期にはタトン出身のパオ政治家ウー・フラペ（Thaton U Hla Pe）を長としたパオらがパオを代表してカレンの主流派民族組織であるカレン民族同盟（KNU）に参加して，カレンとしての自己主張を展開した。そしてウー・フラペは，1947年２月のKNU設立に際して副議長に選出されるほど知名度があった。しかし，戦後に諸民族がこぞって反政府武装闘争に参入した際には，パオ民族機構（PNO）というパオ独自の組織を設立している。

ウー・ピンニャがその「カイン王統史」を執筆するに当たって主要な依拠史料としたのは，あるいはこの書を著そうというきっかけを提供したのは，後書きに書かれたエピソードによれば「パオ語で書かれたカイン王統記文書」であった。それは，「シャンのくにマインカイン（Maingkaing）(17)産の白い紙に黒インクで片面のみに書かれ，パオ・タウントゥ(18)文字にて綴られた，縦１タバウンほど，横12レッマほどで(19)，ページ数29ページをカンバス地の表紙にて綴じられ，折り畳まれていた」［Pyinnya 1929: 173］という，その形状描写から察するに，通常，折り畳み写本（パラバイッ）と言われる形式の文書であった。ウー・ピンニャの語る入手の経緯は，以下のとおりである。

1270年ナッドー月（1908年11／12月），ウー・ピンニャは幼馴染のシャン・ルーミョウで，コーカレイッ（Kawkareik）・ミョウの南東３マイルにあるミョウハウン（Myohaung）村の僧院住職であるナンダマラ師(20)の招請を受けて，彼のもとを訪ねた。この住職はバゴー県の出身で，ドゥワラワティ派の僧院で具足戒を受けマンダレーに修養し，諸地方をめぐったのちミョウハウン村の僧院に落ち着いたという。この村はほとんどがカインかパオ・ルーミョウであり，したがってナンダマラ師も必要に応じてシャン語，モン語，ミャンマー語，パーリ語，カイン語，パオ・タウントゥ語をよく使い分けた。ウー・ピンニャは村近くにあるドーナ山脈の嶺続きの丘に登り，そこで古い遺構を目の当たりにし，それがかつてのカイン王国の城址のひとつであることを教えられる。そして，ナンダマラ師の付き人のパオ・ルーミョウのもとにシャン州マイ

ンカイン製の紙に書かれたパオ語のカイン王統記があることを知り，もろもろのカイン僧やパオ僧，そしてシャン僧ナンダマラらの助けを借りて３日間でビルマ語に翻訳したという［Pyinnya 1929: 171-175］。

ここではつぎの２つの点について注意を喚起すべきであろう。第一には，ウー・ピンニャの執筆当時，カレンの歴史がパオ語で書かれてなんら不思議はないほどにカレンとパオとが互いに親密な民族同士であると観念されていたことである。そして第二に，ウー・ピンニャの参考文献なかでも，王朝創始者やその系譜の詳細など，記述の肝要な部分の大半をこの文書から得ているなど，突出した重要性が見出せることである。ほかにも巻末には26の参考文献が列記されており，よく知られた『玻璃宮御年代記（hmannân maha yazawin dojî）』や『コンバウン王朝年代記（kôunbaunze' yazawin）』などのビルマ語年代記，あるいはモン語の原典からビルマ語に翻訳された年代記や仏教経典などであった［*ibid.*: 175-177］。

ウー・ピンニャが「カイン王統史」において王朝興亡史の主たる舞台として描いたのは，パアン地方という，ウー・ピンニャの出身地でモン仏教の中心でもあるタトンの後背地であり，「パオ語のカイン王統史」の発見地であり，そしてプー・タマイッがポー・カレン文字を考案しポー・カレン語の仏典が編纂された「カレン仏教」揺籃の地であり，さらには今日でもカレン仏教の本拠が存するとされる土地柄であった。「パオ語で書かれたカイン王統記文書」が実在したか否かはさておき，ここで強調されるべきは，それを通して『カイン王統史』に有り余るほどの材を提供しえた，密で豊富な伝説や説話などの歴史的記憶，あるいはこの記憶を醸造する土壌となった濃密な対他民族関係を，ウー・ピンニャの背景とした東部のカインらが保持してきたことである。つまりは，ウー・ピンニャはこのようなモン仏教・王統，それにパオやシャン，ビルマ，モンという人々との歴史的関係という記述資源をふんだんにその「カレン王統史」に利用することができた。

第２節　ウー・ソオの背景

さてつぎに，いまひとりの仏教徒著者であるウー・ソオについて検討の対象を移そう。

ウー・ピンニャと同様にウー・ソオに関する情報も限られている。著書からはやはり，カレン系のいずれかのサブグループに属していたことは読み取れる。その著書「クゥイン御年代記」の表紙にはウー・ソオが，ラングーンにあった総督府の翻訳部門のパーリ語翻訳官として紹介されている。だが当時の官僚名簿季報（The Quarterly Civil List for Burma）［Governmet of Burma 1930,etc.］にはウー・ソオの名は見当たらず，翻訳官吏であったとしてもおそらく官報非掲載（non-gazetted）の位の低い官吏であったろう。生没年も不詳であるが，著書の中表紙裏に掲載されている写真が近影であったなら，執筆当時（あるいは1931年の出版直前）40 ～ 50代の壮年期にあったように見受けられる。そうであれば1870年代から90年代初め頃までの生まれであったとの推定も成り立つ。

「クゥイン御年代記」で参考にされた文献は主にビルマ，モン，シャンの王統記や仏塔縁起，釈尊の説法集，釈迦出生譚，諺（ザガボン）や説話（ポウンピン）であり，そして他にも「インドに残る古代の文書や碑文」，「ギリシャやイタリアの古典」(21)，同時代に出版されたインド人や西洋人によるインド史の文献(22)など，かなり雑多に渉猟された旨が記されている。このような典拠は，彼が巨大な植民地インド帝国の一州としてのビルマにおける現地雇用の官吏として，英人支配者層が持ち込んできた書物や知識に間近に接してきたことを物語っている。他方，ウー・ソオのカレン史には，1929年10月に出版されたウー・ピンニャの『カイン王統史』は含まれていない。ウー・ソオはウー・ピンニャの著書を知らなかったらしく，序言に「今まで（クゥインの）王統記が

書かれてこなかったのは驚きである」［Saw 1931: 1］と述べている。

洋の東西を問わない多種の，しかし直接的にはカレンの歴史とは関連しない幅広い文献を利用していること，そしてウー・ピンニャの書物あるいはそのような濃密なカレンの歴史記述に満ちた文献を使わないことの結果，ウー・ソオによるカレン史像は具体性に乏しい，平板な印象を与えるものに終始してしまっている。両仏教徒著者のカレン史叙述の最大の相違点は，この記述の粗密という点にある。以下第３章の内容を少々先取りすれば，ウー・ピンニャはカインの王統をモン・カインふたつ，ミャンマー・カインひとつ，そしてシャン・カインひとつの計４系統に分類し，各々に具体的な細部にわたる記述を盛り込んでいる。とくにモン・カインはズウェヤー王統の主家とミャワディ，メーカラウン，チャイッ，ドーンパポウン，パウン，ドーンムウェの６つの傍系，そしてパアーワナ王統の本家とチャイン，ターチャイン，フラインボウェ，カザイン，タクウェボオの５つの分家について歴代当主のリストと事跡を詳述している。これに対してウー・ソオは，インド古代のコーリヤ族とその入緬，ピュウ・カンヤン・テッという古代三民族への分化など，やがてはクゥインに連なり，在ミャンマーの全ての民の祖先であるこれらの民族についての説明にこだわって，クゥイン自体の歴史には具体的細部が欠落している(23)。記述の粗密の違いは，ウー・ピンニャに「パオ語で書かれたカイン王統記文書」があり，ウー・ソオにはそのような緻密な歴史を証言する典拠がなかった，というところに直接的な理由がある。したがって，この不備・粗雑さを補うために，かように幅広い史料を流用せざるを得なく，またそれによって権威付けを頼むしかなかった。

では，どうしてウー・ソオには，ウー・ピンニャにおける「パオ語のカイン王統記文書」のような典拠がなかったのか。それは，ラングーン以西のカレン諸語を話す仏教徒のありかたと表裏の関係にあるように見受けられる。東部のカレン仏教徒から眺めると，ラングーンより西方，とくにその大部分を仏教徒

が占めてビルマの全カレン人口の３分の１が居住する西部デルタ地方には，現代でも「カレン仏教文化の果てんとする土地柄」[Sayadaw Pt：カレン州にあるカレン寺院の僧上] というイメージがある。パアン地方から西に離れるにしたがって，カレンの仏教徒は隣人のビルマ人仏教徒と僧院を共有し，民族独自と目される仏教施設が少なくなる。たしかに現在，ラングーン市内にはいくつもカレン僧院がある。しかしこれらの僧院は最も古くて1930年代前後，つまりウー・ピンニャやウー・ソオの時代に創堂されたものばかりである(24)。（むしろ，この時代に仏教徒カレンの歴史が書かれ，その僧院が多く造られることになったのには，共通の底流があるのではないか，というのが本稿の趣旨のひとつである。）ウー・ソオの具体性に欠けたクゥインの歴史のあり方は，彼の背景とした仏教徒カレンにおける記述資源の欠如を示唆している。

ウー・ソオのカレン仏教に，それに固有な過去の知識の典拠がなかったとしたならば，彼の手近にあった欧米人の著書によるカレン記述に仏教的な潤色を加えてカレン史を再構成することもできたはずである。上述のようにウー・ソオは，植民地政庁の支配拠点たるラングーンの総督府に勤め，その書庫には「ギリシャやイタリアの古典」や英人の書いたインド史書，大英インド帝国の考古局が出版していただろう「インドに残る古代の文書や碑文」を集成した拓本刊本の類が所蔵されていて，彼はそれらを参照したのであろう。しかし同じ書庫，あるいはユダ・エゼキエル通りの政府刊行物販売所（Government Book Depot）や，パーリ語関係の蔵書が充実していたというバーナード公開図書館（Bernard Free Library）など，現地官吏の彼でもアクセスできたはずの場所で，ローウィスの書いた「ビルマの諸族（The Tribes of Burma）」[Lowis 1919] や，エンリケズの「ビルマの人種（Races of Burma）」[Enriquez 1924]，スコットの「上ビルマ及びシャン州地誌（Gazetteer of Upper Burma and the Shan States）」[Scott and Hardiman 1900] をはじめとして1920年代にも盛んに刊行された諸種の官製ビルマ地誌（Burma Gazetteer）など，カレンに関する

記述を多く含んだ，よく知られた書物を見ることができたはずである。それのみならず，バプティスト関係者の出版したあまたのカレン関係書籍を手にとることができたはずである。むろん，そういった英人官僚や米人宣教師の書いた書物は，キリスト教徒のカレンを前提としていた。しかし，ソオ・アウンフラがウー・ピンニャとウー・ソオの著作を，仏教的要素を排した上で自身の著述に取り込んだように（これについては別稿を予定），情報を取捨して仏教色を添加することもできたはずである。だが彼は（そしてウー・ピンニャもまた）これらの書籍に言及せずに，ビルマやモン，シャンの王統記や仏典を典拠として重用して仏教徒としてのカレンの歴史を書いた。それはなぜなのだろうか。

第３節　歴史叙述の範型

そもそも，ウー・ピンニャとウー・ソオが生きたビルマの仏教文化圏において歴史を書くという行為には，ふたつの伝統的な叙述形式のうえにその範型がありえた。すなわち，第１は「タマイン（thàmâin）」という仏教史の歴史叙述の形式であり，今日ではこの語が一般的な歴史の意としてビルマ語世界に定着している。第２は，「ヤーザウィン（yazawin）」という王を語りの主体とした歴史叙述のスタイルであった。ウー・ピンニャとウー・ソオもこのふたつのタイプの歴史に親しく接していて，上述のごとくその参考文献には多くの仏典や仏典注釈書，ビルマ語のヤーザウィンの類を使用している。そして彼らは自身の著書のタイトルにそろって，ヤーザウィンの語を付している。

ヤーザウィンはパーリ語の「ラージャ（rāja王）」と「ヴァンサ（vaṃsa 歴史）」に由来する語であり［石井 2003b: 323］，ふつう王統記，王統史，年代記などと訳される。かような王統記のうち，ビルマ語で書かれて現存する最古のものは1502年編纂の『普遍王統史（yazawin jo）』であり，以後，『洞吾王統史（Toungoo yazawin）』（16世紀），『大王統史』（1724年），『新王統史（maha

yazawin thi')』(1798年),『玻璃宮御年代記』(1832年),『コンバウン王朝年代記』(1905年)など,20以上が知られている[25]。これらの王統記に共通する点は,小劫・阿僧祇劫・大劫の時間観念と刀兵災・疾病災・飢饉災といった厄災などによって特徴付けられる仏教的宇宙観,『大史』『島史』『清浄道論義疏』などの仏典注釈書の引用によって意識される仏教史の流れ,豊富な神話や伝説,そしてなによりも王(ミンmîn)の事跡が中心的な関心事として記述されることである。そこでは王が釈迦族の血筋をもつ出自にあることが必ずや言及され,さらに遡れば人類最初の王「摩訶三摩多」に至ることが確認される。そして16世紀以後のビルマ語王統記に通底する最たる性格としては,「そこで取り扱われる対象は専ら国王だけであり,国王以外の者は単なる脇役にすぎない」[大野 1987: 19-20]のであり,欽定の王統記ともなればなおさら,ミンこそが主権的な存在であることに例外はない。つまり,ヤーザウィンとは,王朝や王の治績を顕彰し,統治者としての正統性を宣布することを目的とした歴史叙述の文書である。

このようなヤーザウィンという伝統的な歴史叙述形式を採用してウー・ピンニャとウー・ソオがカイン/クゥインの歴史を描いたとなれば,いまだその本文テキストの検討を行っていないこの段階においても,彼らにとって歴史を書くことがいかなる意味を持ちえたのかについての,いくつかの疑問が提示されることになる。2書が書かれた1920年代から1930年代にはすでに,ビルマにおける王朝は過去のものであった[26]。となれば,王朝断絶以後にウー・ピンニャとウー・ソオが王統記の形式にたのんだのはなぜか。そしてビルマやモンの王統記ではなくカレンの王統記を書く,つまり一般には王朝的単位持たなかったとされる民族の王統記を書くとは,いかなる意義が企図されていたのか[27]。さらに,カレンなる非ビルマ民族の王統記を書きながら,なおかつビルマ語で書きカレン語を使用しないのはなぜなのか。このような疑問を念頭に,つぎにテキストにおける2人の著者によるカレンに関する主張を検討してみる。

第３章　テキストの主張

ソオ・アウンフラのキリスト教カレン史も含めて３書に記された前近代までのカレンの歴史は，これまでまったく知られてこなかった記述に満ちている。これに関しては，通常のビルマ王朝史の立場から眺めて常軌を逸したストーリーに溢れていると一笑に付されることもあった［例えばThan Tun 2001: 76］。たしかにカレンの歴史について一般には，植民地時代以前の直接的な確たる文字史料がなく，カレンがどのような人々であったかは，おもにビルマ民族の諸王朝ののこした断片的な記録からわずかにうかがい知ることができるに過ぎないとされる。ウー・ピンニャの描くカレンの歴史は具体性に富んだ豊かなイメージを内包しているが，そのカレン像の詳細の多くは前章で記したとおり，彼が発見したという「パオ語で書かれたカイン王統記」という古文書に負っている。この文書は現地のカレン人研究者によってながらく捜し求められているが，行方は杳として知れない。あるいは，ソオ・アウンフラの描く「プアカニョウ」諸王朝の歴史の多くは通常，他民族の王朝のそれとして学界で定説化していたり，定説からかけはなれているものばかりである。このようなことから，これらカレン史３種をいずれも想像をたくましくした物語であると両断するのはたやすかろう。

しかし，ウー・ピンニャは彼の著書を出版するのにあしかけ20年以上を費やしたと言い，ソオ・アウンフラも少なくも７年以上は執筆にかけたことが分かっており，ともに多大な時間と労力，情熱を傾けて出版にこぎつけている。また筆者自身の経験からいえば，各地のカレン・コミュニティの古老を訪ねてカレンにかかわる歴史史料を所望すれば，いずれかのカレン史書の名を挙げられそれを知っているかと問われ，あるいはそれらにルーツを持つ書き物がかならずや引き合いに出されてきた。つまり，相当の労力と情熱を込めて出版されたこ

れらの書物には，みずからをカレンと考えるひとびとの琴線に触れるなにかが含まれていて，ある種のカレンのエートスがこめられている。

そのエートスがどのようなものであるかは，ごく慎重にならなければならない。しかしこれらの書物には少なくとも，自らをカレンと考える著者たちにとっての好ましきカレン像，つまりこのミャンマー領域においてカレンがどのような存在であるべきで，何に連なるべきものであるのかという願望が表明されている。そして，その願望は著者たち自身の生きた環境や時代との交渉のなかから生まれてきたものであり，この願望を出版という手段によって社会的に表明せねばならなかった動機があった。さらに，オリジナルなカレン史３種すべてが1929年から39年という比較的短いあいだに出版されているとすれば，（むろん，出版という手段が大衆化したという副次的な要因もあったかもしれないが）この植民地末期の社会状況の中にこそ，カレンを自己主張し標榜せねばならなかった理由があったのではないか。以下，第３章ではまず，筆者の描くカレン像に込められた彼らの「願望」を炙り出したい。

第１節　ウー・ピンニャ『カイン王統史』

ウー・ピンニャの著書は３部11章77節[(28)]で構成されている。第１部では，世界の起源とそこに住む101の民族，シャン・カイン（Shan Kayin ／ shân kayin），ミャンマー・カイン（Myanmar Kayin ／ myanma kayin），そしてモン・カイン（Mon Kayin ／ mwun kayin）[(29)]と３種に分類されるカインについて，そのうちシャン・カインの略史，モン・カインの２つの王統，そしてそのうち第一の王統のズウェヤー（zwêyà）王朝についてが述べられている。つづく第２部ではモン・カインの第二の王統であるパアーワナ（pàawànà）王朝の歴史について，第３部ではミャンマー・カインの王統について詳述される。このように，モン・カインのふたつの王統が３部のうち２部近くを割いて記述の

中心となるわけであるが，ウー・ピンニャの描く「カイン」は，その始原においてすでに仏教の篤い信仰者であり，ミャンマー族に先立って仏教を受容していたといわれるモン族に近しい人々である。

第１部冒頭では，伝統的な王統記／年代記の形式にのっとり世界の起源が仏教的世界観によって描かれており，人間が住むという贍部洲（閻浮堤 zabudazei'）における101の民，つまりルーミョウ（lumyôu）の中にカインを位置づける。これら101の民は詳細にリスト化されており，ミャンマー，タウントゥ[30]，ピュー（pyu），カンヤン（kân yan），ヤカイン（yàhkain）など「ミャンマー７種」，「タライン４種」，テッ（the'），チン，シャン，ラワ（làwà），ヨー（yô），ユン（ywûn），ダヌ（dànû），ヨーダヤー（youdàyâ）など「シャン30種」，バリ（bali，現インドネシアのバリ？），インガレイッ（ingalei'，イギリス），ピンティッ（pyinthi'，フランス），ルーシャー（rushâ，ロシア），バラナシー（baranàthi，ベナレス）など「カラー（kala）[31]60種」がふくまれる。このリスト中，カインはシャン30種に含まれており，ウー・ピンニャによる分類にしたがえばこのカインは後述するシャン・カインに相当するという［Pyinnya 1929: 10-12］。

ウー・ピンニャによるカインという民族名称の起源についての考察は興味深い。今日カイン（Kayin）とはビルマ語によるこの民族集団の他称とされているが，ウー・ピンニャは，スゴー自称の「プアカニョウ」やポー自称の「プローン（西ポーでPhloung:，東ポーでPhloung）」などの語ではなく，この「カイン」という語から語源をたどる試みを始め３つの説を提示する。第１にもっとも紙片を割いているのが，古代モン王国のパーリ語名称トゥワナブーミ（thùwananàbumì）の古称カランナカ（kàrannàkà）から派生したという説である。このカランナカ国の平野部に居住していた人々がやがてモンとなり，森の居住者がカラン（kàràn），つまりのちのカイン（kayin）となったとする[32]。第２にはkiràtàというパーリ語の語彙を，見識高いサヤードー（僧正）らが

カインという意で使っていることを指摘する(33)。『アビダンニッタヤティッ(àbìdan ni'tàyà thi')』なる書物では明確に，kiràtàにカインの意があることを記しているという。そして第3の説として，焼畑（taun ya）を生業として，地面に鉄棒で穴を開けて播種する習慣をもった人々をパーリ語でカラ・ルーミョウ（kàrà lumyôu）と呼び，これがのちのち，カインに変化したとする［*ibid*.: 12-14］。

表2　ウー・ピンニャによるカレンの分類

<table>
<tr><td colspan="6">（1）カインニー（kayin ni）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">分類／別称</td><td>居住地</td><td>起源</td></tr>
<tr><td>①シャン·カイン
［shân kayin］</td><td colspan="3">・グウェタウン［ngweitaun］
・ナウンパレ［naunpùlê］
・チェッボヂィ［ce'bôujî］
・チェッボーカレー［ce'bòukàle］
・ルウェコー［lweko］</td><td>シャン·ピィ(国)</td><td>シャン·ルーミョウ</td></tr>
<tr><td colspan="6">（2）カインピュウ（kayin hpyu）もしくはカインレーメー（kayin lemê）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">分類／別称</td><td>居住地</td><td>起源</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">山地カイン［taunbô kayin］</td><td rowspan="2">平地カイン
［kwîn kayin］</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td></td><td>西部山地カイン［ànau' taunbô kayin］</td><td>東部山地カイン［àshè taunbô kayin］</td></tr>
<tr><td>②ミャンマー（バマー）·カイン
［myanma (bàma) kayin］</td><td colspan="2">『野蛮なカイン［àyâin kayin］』
・シャウン［shaun］
・プアカニョウ［pwakànyo］
・バマー·カイン［bàma kayin］</td><td>パーティ·バマー·カイン
［hpàhtî bàma kayin］
・ヤベイン［yàbêin］
・ザベイン［zàbêin］
・クウェ·カイン
［kwè kayin］</td><td>(西)イラワディ河西岸からサンドウェイ7地方（東）タウングー山地の東西</td><td>ミャンマー·ルーミョウ</td></tr>
<tr><td>③タライン（モン）·カイン
［tàlain (mwûn) kayin］</td><td colspan="2">『文明的なカイン［àyin kayin］』
・ハーパローン［hàhpàloun］
・プワポー［pwapo］
・タライン·カイン［tàlain kayin］</td><td>モーティ·タライン·カイン
［môuhtî tàlain kayin］</td><td>ラーマニャ国</td><td>タライン·ルーミョウ</td></tr>
<tr><td colspan="6">出典：Pyinnya 1929: 14-17.</td></tr>
</table>

カインの分類としては，上記のとおりシャン・カイン，ミャンマー・カイン，モン・カインの3種がある(34)。しかも3種のカインはおのおの直接的にはシャン，ミャンマー，モンに起源があり，遡ってはやがて，ビルマにおける諸ルーミョウは単一のビャマ（Byama，ブラフマン，梵天）ルーミョウに行き

着くとされている。これ以外にも諸種の呼称や分類基準について詳しく説明しており，シャン・カインをカインニー（kayin ni，赤カイン），ミャンマー・カインとモン・カインを合わせてカインピュウ（kayin hpyu，白カイン）あるいはカインレーメー（kayin lemê，黒首カレン）とするのがもっとも根本的な分類であるとする【表２参照】。そしてシャン・カインについて，『コンバウン王朝年代記』からコンバウン朝との朝貢関係をしめす西暦1798年（緬暦1159年，以下緬暦などは省略），1807年，1863年のエピソードが引用されているが，このの ち『カイン王統史』の記述はモン・カインとミャンマー・カインの王統史が中心となってゆくことになる［*ibid*.: 14-18］。

モン・カインの故地はラーマニャ（ramànyà）とよばれるモン人の古王国内にあり，モン・カイン２王朝のうちズウェヤー王朝が第１部後半を費やして描かれている。モンの中心地タトンは世界の始まりから存在していた古い都で，釈尊の生誕50年前まではカランナカと呼ばれていた。ズウェヤー朝は，東の強国ヨーダヤーのモン王国への越境侵攻とその撃退にともなって，両国のくにざかいにモン王によって設置された鎮守府に起源があるという(35)。いっときはモンの都を包囲するまでであったヨーダヤー軍を撃退したのち，モン王テイッターテッカー（tei'thathei'kà）は，両国を隔てるドーハナ（ドーナ）山脈を越える唯一の峠道の入り口に布かれた陣において，７ヶ月におよぶ勝利の宴を催した。この宴の終盤，モン王はこの地方に住むロー，ラワ，タライン，カインの民に影響力があり，武勇聞こえた実力者のカイン人エインダ（Einda）に，５種の神器，10万の兵，徴税権，ズウェヤー・ミョウ（myòu）(36)の封地，そして「ソーバニャーエインダテーナーヤーザー（Saw Banya Einda Thena Yaza ／ sô bànyâ eindà theinà yaza）」なる称号を下賜して，同地の太守に任命した。ズウェヤー・ミョウは，コーカレイッの南東３マイルにあるミョウハウン（myòu haun）村近郊に「今」，つまりウー・ピンニャの執筆当時でもその遺構が確認できたという［*ibid*.: 43-45］。

ズウェヤー・ミョウはテイッターテッカー王崩御ののち，周辺の６ミョウを従えて独立する。６つのミョウとはミャワディ（Myawaddy）(37)，メーカラウン（Mekalaung），チャイッ（Kyaik），タウンボー（Taungbaw），パウン（Paung），ドーンムウェ（Doungmwe）である。エインダ王の死後，ズウェヤー王国は分裂し，各６ミョウがさらに独立，そしてもっとも東に位置していたメーカラウンとドーンムウェはヨーダヤーに併呑され「今」もヨーダヤー領内に組み込まれているという。のこる４ミョウとズウェヤー・ミョウについては，その王統やミョウの名の由来，歴代支配者（ミョウザー）リストなど詳しく説明されている。ミャワディ２代，パウン９代，チャイッ11代，そしてズウェヤーに至っては28代の王がリスト化され，幾人かは簡単な注釈が付されている［*ibid*.: 57-102］。

第１部末尾には「教訓を得るために」という一節があり，ズウェヤー朝の歴史が1756年にミャンマー王朝の一部として併合されるまで存続したこと，さらにそのミャンマー王朝も1825年，1852年そして1885年の三次にわたる戦争を経て英領に編入されたと総括している［*ibid*.: 102-103］。

つづく第２部で語られるパアーワナ王朝の歴史は，ズウェヤー王朝のそれにも増して詳細で多岐にわたっている。パアーワナとは，現在でもカレン州内にあってとくに仏教徒のカインたちから聖山として崇められているズウェカビン（Zwekabin，スゴー語ではクウェカボウ）山のふもとに広がっていた，仏陀生誕以前からあったという森の名である。この森にラスウェ（Laswe）という猟師がおり，モン王テイッターテッカー王がヨーダヤー軍を追い落としてズウェヤー・ミョウを開こうとしていた頃，勝利の宴に森の獲物を貢物として王に献上したという。モン王はいたく喜び，エインダ同様，５種の神器と王の称号，そしてパアーワナの森を切り拓いてミョウを創建する許しを与えた。モンの年代記の記述によると，釈尊が悟りをひらく14年ほど前にこのミョウの歴史は始まり，仏暦1601年（12世紀）のマヌーハリー（Manuhari）王治下まではなが

らえていたことが「確実」であるとしている。パアーワナ朝史において特筆すべきはズウェカビンの存在で，山頂の仏塔の縁起が初代ラスウェ治下における釈尊来臨をまじえて詳述されている［*ibid.*: 105-108］。

パアーワナ・ミョウもまたテイッターテッカー王崩御ののちに独立し，チャイン（Kyaing，あるいはヂャインGyaing），ターチャイン（Takyaing），フラインブウェ（Hlaingbwe），カザイン（Kazaing），タクウェボー（Takwebo）などの周辺５ミョウを治下におく。そして各ミョウもやがて分立することになる。ここでも各ミョウ王統がリスト化され，ターチャイン13代，チャイン13代，タザイン７代の王の名が列挙され解説がされているが，フラインブウェ王統は「パオ語のカイン王統記文書」原本が破損しておりほとんどが判読不能だという。また，各王統はモン人との深い関係をもって描かれており，たとえばターチャインの第４と第５代はモン族であったが，のちモンとの戦に勝利し，民の望んでいたカイン族の王，しかも同ミョウ初代トーラヤーザー（htolàyaza）の孫が第６代に返り咲いた，と記している。パアーワナ朝は，13世紀にビルマ族のパガン朝がモンに侵出したことにより，より広域の政治情勢に取り込まれることになる。1287年にはパガン朝下に編成されたモウッタマ32ミョウにパアーワナも組み込まれ，これ以来，自主独立を保ったカイン王統は途絶えた。そして1757年，ビルマ族のアラウンミンタヤー大王（アラウンパヤー）がラーマニャ３郡を併合したが，この東側にザヤー，ズウェヤー，パアーワナなどカインの古い都城も含まれていた［*ibid.*: 115-143］。

第３部はミャンマー・カインの王統史がまとめられている。上のタライン・カインの二つの王統史は，釈尊の生誕以前というたいへん古い時代から書き起こされ，バガンによるモン王国の滅亡のころと比定される時期までを黄金期として描かれている。これにたいしてミャンマー・カインの王統史は，『玻璃宮御年代記』や1791年編纂という『シュウェモオドオ縁起』，モン語の王統記，1815年にビルマ語に翻訳されたモン王統記の抄本文書などを典拠として比較的

新しい時代を中心に詳しく描かれる。ミャンマー・カインとその王国は，西暦で言えば1740 ～ 47年あるいは53年までというアラウンパヤー王によるコンバウン王朝樹立のころの混乱期を時代背景にしており，通常のビルマ史ではモンがカレンの助力を得てうちたてたハンタワディ王国の歴史を，カレン側から再構成したものとも見ることができよう。

1740年，ミャンマー族のインワ朝によって任命されていたハンタワディの太守が暴政のために暗殺されそれにかわる支配者選びが進んでいる頃，クウェ・カイン（kwe kayin）すなわちウー・ピンニャのいうところのミャンマー・カインのあいだにミンラウン（未来王）が現れたという噂がひろがっていた。このクウェ・カイン人はインワ王がカイン女性に産ませた落し胤であるとされ，やがて人々に受け入れられタメイントー（Thameinthaw）との号を得てハンタワディの王に推戴された。のちに象と虎の所有者という意のシンチャーシン（hsin câ shin）との称号でも呼ばれている。タメイントー王はクウェ・カインとモンたちとともに叛乱を起こし，現タイ国チェンマイのジンメー国と連合関係を結んで，バゴーを王都に富国強兵策をすすめた。1741年から47年までの上ミャンマーのミャンマー族王朝への遠征の様子が詳しく描かれる。だが，タメイントーは象狩りに興じ，1747年ジンメーに亡命して退位したという。あとを継いだのはジンメー出身のシャン人であり，この王の下クウェ・カインの将軍らによる北部転戦が1753年ころまでつづいたことが描かれ，第３部は締めくくられている［*ibid.*: 145-163］。

第２節　ウー・ソオ『クゥイン御年代記』

著書は全16章構成で[38]，ごく短い序と結が前後に付してある。贍部洲の縁起，古代インドの諸族の興亡，ミャンマーの地への来住と盛衰，というおおまかな流れは見えるものの，ウー・ピンニャやソオ・アウンフラの著作とは異な

り，時間を追った歴史叙述，明確なテーマを画した章立てとはなっていない。しかも，既述のとおり，クゥインの歴史とは銘打ちながらもクゥイン自身に関する叙述はかならずしも多くなく，それにやがては連なるとされる古代インドの諸々の古王国と王ら，釈迦族とのつながり，あるいは始原の民の入緬後の動向に多くの紙片を割く。

第１章は『贍部洲（zanbudei' cwûn）のそとにくにぐに（tâin pyi hkàyain naingan do）が創建されていったことについて』と題して，世界の起源と世俗的な国々の誕生を述べる。かような諸国のなかでもウー・ソオの関心は，ミャンマーとモンのそれにある。以下の章は，『クゥイン・ルーミョウが発祥した大ミャンマー国（myanma pyi jî）についてとともに，くにぐにが打ち建てられたことを述べるについて』（２章），『アパランダ国（àpàrandà tâin）とよばれるミャンマー国以外に創建されたくにぐにについて』（３章），『このアパランダ国がのちにミャンマー国と呼ばれるようになったことを述べること』（４章），『ラーマニャ国（ramànyà tâin）とアティティンザナ・ミョウ（àthìtinzànà myòu）が発祥したことを述べること』（４章kà）とつづく［Saw 1931: 7-39］。このような流れの中で，クゥインの始祖となるインクーラ（inkùrà）王の来歴が述べられる。インクーラ王は，インド（eindìyà）のガンジス河（ginga）のほとりにあったラッダーラパター（ra'dàràpàhtà）国の王族の末子として生まれた［*ibid.*: 19］。この王族と王国の様子が詳述され，インクーラはやがて，ミャンマー中原にやってくる。しかし，ほどなくこの地を打ち捨ててイラワディ河沿いに南下し，ダゴン（dàgoun）(39)の地にいたってアティティンザナという町（ミョウ）を開いた［*ibid.*: 35］。そしてこのミョウを首府としてインクーラ国を建設し，これが後にラーマニャ国と呼ばれることになったという。ラーマニャは通常，モン人の王国の古称とされる語であるが，ウー・ソオはインクーラがクゥインの国であったと，とくに名前の言及されていない「サヤードーたち」が主張していたことを述べる［*ibid.*: 38-39］。

第５章の『インクーラという名から“クゥイン”という名が変化してきたという説を示し述べること』では，モン（mwun ／ Mon）という民族の名称とともに，クゥインなる名の由来を詳述する。そもそもカレンのビルマ語呼称はカイン（kayin ／ ကရင်）が一般的であり，ウー・ソオもそのことを念頭に，実はクゥイン（kùyin ／ ကုရင်）なのだとわざわざ主張する。カインとクゥインのビルマ語表記上の違いは，頭子音のက（それ単体ではkàの音価）にùの音価をもつタチャウギン（ ု）という母音符号がつくか否かのみである。ウー・ソオはその理由を，カレンの始祖たるインクーラ王の名に求める。inkùrà（အင်္ကုရ）の第1音節in（အင်）が落ちてkùrà（ကုရ）となりkùyinになったのだ，と説明する[40]。しかし，このような高貴な出自にもかかわらず，クゥインらは他の悪習をもった民族とのかかわりを謝絶し，やがて山地にこもることになったので，他民族からは野蛮で開化されていない（ayâin asâin）ルーミョウと見られるようになった，とする［*ibid*.: 46］。

こののちの章は，『自らの考えによって“クゥイン”らの始原を示し述べること，ならびにアンダヤータヤッを批判することを示し述べること』(６章)，『釈迦族の王 (thàcàthakiwin mîn) が現われてきたこと，皇統王統について』(８章)，『中天竺（mi’zyìmà dethà）の諸インド王統記に記された釈迦族の王の系譜が栄えたことを示し述べること，ならびに諸々のインド王統記にて述べられたことと大王統史などにおいて述べられていることを比べること』（９章）とつづく。しかし，表題に現われるようにはクゥインについて触れられることもなく，古代インドの釈迦族についてなどに終始する。そして，第10章は『釈迦族諸王より“モン”ルーミョウと“クゥイン”ルーミョウらが互いに近親の人々として出でたことを示し述べること・・・(略)』と題され，モンとのつながりのうえで入緬後のクゥインの歴史が語られる。そして，従前の章まで依拠してきたインドのもろもろの王統記とくらべ，ミャンマーにある王統記文書がいい加減なものではない，そして世界の初めからミャンマーの民族は文明的であったのだ，

と主張し［*ibid.*: 90-91］，これ以降とくにモンの王統記に拠って叙述を展開させる。

第11章は『モン王統記のサヤードーらの主張していることを抜粋し示し述べること』とのタイトルを持つ。ここではトゥワナブーミ（thùwannàbumì）と呼ばれたタトン，あるいは別称カランナカ国（karannàkà）について説き起こされ［*ibid.*: 94-95］，ミャンマー領域の南北にはしる３本の山脈とそれによって区切られた諸地方に，ミャンマー，モン，シャン，ヤカインチン，ヨーダヤー，カチン，ラワ，パオ（pau ／ Pao），カインニー（kayin ni）(41)，そしてクゥインらが住んでいたこと，タニンダーイー（tanindhari）山脈がミャンマーとヨーダヤーを隔てていたこと，などが述べられている［*ibid.*: 96-98］。そしてモンの王統記の説明によれば，ミョウ（町）に居住していたモンらが，森や山にいた人々をカリ（kari）と呼んでおり，これが後にクゥイン（kùyin）・ルーミョウになったという説を紹介している［*ibid.*: 99］。

第11章の後半，ウー・ソオの筆先はふたたび釈迦族の系譜に関する記述におもむき，釈迦族の裔がデーワダハー（deiwàdàha），コーリヤ（kôlìyà），カッピーラ（ka'pilà）という３つの国を形成しており，３国の滅亡とともにそれらの国々を構成していたルーミョウ，すなわちコーリヤ・ルーミョウはティリキッタラー（thirìhki'tàra，あるいはタイェーキッタラthayeihki'tàra）の国に入った。やがてこのティリキッタラーも衰退し，コーリヤ釈迦族（kôlìyà thakiwin）の王統は，ピュー（pyu），カンヤン（kân yan），テッ（the'）という３つのルーミョウに分かれるようになった。そしてこの古代３民族のうちカンヤンこそが，クゥインの直接の祖となった人々であった［*ibid.*: 101-105］。この章の末尾には「特別註釈」の一項が置かれ，クゥインが釈迦族の直系であるコーリヤ・ルーミョウから流れ出でて，仏の教えを奉じたルーミョウであったことが縷々述べられている［*ibid.*: 106］が，これは後に詳しく論じて見たい（第４章第２節）。このように，第11章以降，クゥインの直接の祖にカンヤン，

そのまた祖はコーリヤ，さらに遡って釈迦族の流れを汲む，というモチーフが定着するのだが，それ以前に紙片を割いて解説してきた，クゥインの名の由来となったインクーラ王とその国，あるいはこれらの叙述体系との接合がどのように行われているのかは，かならずしも定かではない。

こののち，『アデイッサーウンター（adei'sàwunthà），釈迦皇統の王孫たる，ミャンマーに傘差す（htî hsâun）(42) 王侯すべてが栄えたことを示し述べること』（12章），『アデイッサーウンター，釈迦皇統の王孫たるミャンマー王（myanma bayin）らが，ティリキッタラーにおいて即位したことを示し述べること』（13章），『コーリヤ皇統，カンヤンと呼ばれるクゥイン王侯らが大トゥーナパラン（thùnapàran），大タンパディーパ（tanpàdipà）国において最初の宮廷を開闢したこと』（14章），『"モン・ルーミョウ"という言葉が生まれ出でたことに関する，あるサヤードーらの意見を示し述べること』（15章）と続く。ここでもまた，従来の記述がおおく反復され，クゥイン自体の解説はごく少ない［*ibid.*: 107-182］。

最後の第16章は，『クゥイン・ルーミョウらがミャンマー国のうちにひろがり全土を満たしていたということを他のサヤーらの意見に拠って披瀝すること，ならびに第１巻の結び』と題されている。ここではコーリヤ皇統に連なるクゥイン・ルーミョウがミャンマー・ピィの各地にいかに行き渡っていったかをあらためてまとめている。第１に西部では，ダーニャワディ（danyàwàdi）(43) 近在とティントゥウェー（thinhtwê）など７地方に来住したコーリヤの子孫は，クゥインやチンなどのルーミョウになり信仰（badha ayuwàdà）と言葉を分化させていった。第２に東部に行き着いた人々は，ゴウン国（goun pyi），ルー国（lû pyi），タンルウィン（thanlwin）河東岸のマインモー（mâin mô），シークィン（sìhkwin），ホーター（houtha），ラーター（latha），モーナー（môunâ），サンダー（sanda），モーウン（môuwûn），チャインマー（câin mâ），マイン

ミィー国（mâin myî naingan）などに至ったコーリヤ王統の子孫であった。彼らはクゥインをはじめとして，カチン，ラワ，ラーピー（làpi），ウェヒン（wèihin），パオ，タウントゥ（taunthu）(44)，インパン（yînpân），パラウン（palaun），パダウン（padaun），カーコー（hkako），カークィー（hkakwi），ルウィー（lwi），ムゥソー（mùhsôu）などのルーミョウに分かれていった。これらのルーミョウのうち，ウェヒン・ルーミョウは，『玻璃宮御年代記』などにおいて「クウェ（kwèi）」とか「グウェ（gwèi）」，「ウェ（wèi）」などとして言及されているルーミョウであるが(45)，これについての更なるアカウントは，「本王統記第２巻にて詳しく述べる予定である」としている［*ibid*.: 183］。第３にラーマニャ国周縁部のタニンダーイー山脈のくにぐにに達したコーリヤ・ルーミョウは，やがて，クゥイン，ヤベイン（yabêin），タウントゥ，パオらに分かれた。これらのクゥイン・ルーミョウは，おのおの近接して住んでいたルーミョウに即してタライン・クゥイン，ミャンマー・クゥインと呼ばれるようになったという［*ibid*.: 182-183］。

この最終章でウー・ソオは，さらなるだめ押しをするように，あらためてミャンマー史上の諸王国の名とそれを構成するミョウの名を列記して，「これらの大国，傘差す王侯すべての国々において，いかなる国，いかなるミョウ，ユワ（ywa 村）のうちにも，コーリヤ王統（の裔）なるクゥイン・ルーミョウらが存在せず，住んでいないなどとはとうてい言えないのであり，どの国，島（cwûn），カイン（kâin 川の中州），谷間（taunswe）でも，すべてコーリヤ釈迦族（の裔）たるクゥイン・ルーミョウが住んでいるのだ」と強調する。そして，クゥインが釈尊の教えに忠実なルーミョウであること，ほかのルーミョウとのかかわりを避けてきたので野蛮なルーミョウと見られてきたが，決して人後に落ちないよき仏教の徒であることを，いまいちど述べ，クゥインの指導者に民族精神の鼓舞を呼びかけて「第１巻」を締めくくっている［*ibid*.: 184］。

第３節　論点の整理

以上紹介してきた２つのカレン史書は，それ自体としてきわめて多くの情報を含み，多様な解釈と諸種の分析に開かれている。だが，ここではまず主張されている２つのカレン像，すなわちカレンはかくあるべしというそれぞれに現われた「願望」をまとめてみたい。

ウー・ピンニャの『カイン王統史』において，「カイン」とはモンやビルマ，シャンらと同じ淵源に祖を持ち，始原より仏教を信奉して，固有の王統をたもってきた民族のひとつである。モン・カイン，ミャンマー・カイン，シャン・カインと３種に分類されるカインは，それぞれ同名の民族に直近の祖があり，カインの名もモン起源であるというように，これらの民族に強い連帯が示されている。とはいえ，モン・カインの王統が記述の中心となるように，他の民族にもましてモンとの歴史的親密さが強調される。このような連帯は釈尊の教えへの信仰が要諦となって結ばれている。この世界の構成単位は101という象徴的数によって分割された民族であり，いずれの民族もある徳質を備えた王が自らの民族を統べていた。

ウー・ソオの『クゥイン御年代記』における「クゥイン」は，モンへの傾倒はさほど見られずに，ミャンマー領域すべての民族の根源である古代インドのコーリヤ族が釈迦族の直系であったことが強調され，そこにおいてクゥインは仏教を継承した王統につらなる民族である。コーリヤ族は入緬ののちにピュウ・カンヤン・テッという３民族に分化し，カンヤンこそがクゥインであったこと，そしてクゥインの名はインド古代の王インクーラから譲り受けたことなど，釈尊生誕の地インドという表象を介して語られ，いずれもが釈尊の教えを奉じた王統によって民族が統治されていた。

ここで，別稿に詳述する予定のソオ・アウンフラによる『プアカニョウの歴

史』概要を瞥見してみれば，いよいよ２書のカレン像が把握しやすくなるであろう。このキリスト教徒著者の関心は，前２者にあらわれるような仏教原理に抗って，やがてはキリスト教に連なる単神論的な信仰を始原から核としてもってきた「プアカニョウ」というひとびとが，独自の言語・文字・文化・王権を闘争の上に保ってきた歴史を描くことにある。プアカニョウは失われたイスラエルの民で，ながい漂白の旅のすえ無主の地であったビルマ領域へたどりついた最初期の移住者のひとつであって，各地に独自の王国を営み，仇敵のモンとビルマによる苛酷な圧制，そして彼らの宗教たる仏教への絶えざる強制的な教化という圧力をどうにかかわして，ようやくに英国植民地期の彼の時代に，かつてのプアカニョウの栄光が回復されたものとして描く。

このように３書のカレン像を併置してみれば，そこにはカイン／クゥインプアカニョウという民族が，固有の王権をもって，仏教やキリスト教という普遍的な世界原理を体現する宗教に依拠して歴史を営んできたさまが共通して語られていることが了解できる。つまり，いずれの史書にも「民族」「王権」「宗教」という概念が欠くべからざる要素となっている。わけても「民族」は，３書に共通する中心的概念であり，それは「カレンの」歴史書を検討の俎上に載せている我々の議論の前提からも，都合の良いことであろう。だが，カレンという民族が歴史書の不変の主題になりうる，という我々の予断を不問に付するわけにはいかない。冒頭に述べた問題意識に関連して，とくに仏教徒著書において，カイン／クゥインという民族が記述の中心となることについて批判的な検討をせねばならないだろう。

さて，筆者が出版というたいそうな労力をかけてまでも伝えたかった主張が明らかにされたとするならば，「仏教徒カレン」の意識過程の検討に先立つ基礎的条件の解明という本稿の目的に照らし合わせて，次に，これらの主張がどのような論理構造によって支えられているかという点を見ていきたい。ビルマ世界における正統な民族としてのカイン／クゥインという主張が説得的に読者

に伝達されるためには，著者と読者が共有しているこの世界・この時代の成り立ちに関する了解に訴える必要がある。したがって，カイン／クゥインを成立させる宗教＝王権＝民族についての了解構造を，テキストに固有な表現と内実をすくいとりつつ検討することが，次の課題となる。

第４章　テキストの論理

まずは，ウー・ピンニャとウー・ソオがカイン／クゥインをその一部として位置づけたいと渇望しているこの世界，カイン／クゥインを意味ある存在として存立せしめているようなこの空間を全体世界と呼ぶことにしよう。われわれの関心はさしあたり，この全体世界がどのような相貌を呈しているかとか，どのような構造を備えているかという点にはない。そうではなくて，カイン／クゥインがこの全体世界において不可欠な一部として埋め込まれ，正統な一員として認知されるためには，カイン／クゥインにおいて有意味なものとして働いている宗教や王権，民族という概念が，いかなる固有の表現と内実をもってして機能しているか，それらの概念間の連携がどのように作動しているかを見極めることにある。

うえに概観してきたウー・ピンニャとウー・ソオの史書において，おおむね，「民族」は「ルーミョウ（lumyôu)」，「王」が「ミン（mîn)」，「王統」は「ミンゼッ（mînze')」，「ミンヌウェ（mînnwe)」，「ナンヨウ（nân yô)」などと共通して表現されているのは了解できる。しかし，「宗教」や「仏教」はどうだろうか。ソオ・アウンフラにおいてはキリスト教が「カリ・アターブーターバー《khari'L ataLbhuFtaLbhaa》」として呼称されその規範が著述全体を貫いており，「ソオ・ゴータマーブーダー・アターブーダーバー《sô kôtama'M bhu'Mda'M ataLbhuFtaLbhaa》」もしくは単に「ブーダー・アターバー《bhu'Mda'M ataLbhaa》」，仏教はビルマやモン人によって強制されてきた，プ

アカニョウにとっては異質な宗教ととらえられている。そこにおいて特徴的なのは，仏教が論駁対象として詳しくテキスト上で扱われること，したがってキリスト教と仏教が少なくとも宗教（ターブーターバー《taLbhuFtaLbhaa》）という点において同一の次元に属し，同じ範疇に括られるものとして扱われていることである。

これとは対照的に，ウー・ピンニャとウー・ソオが描き出す世界を縦貫するような規範で，上に易々と「仏教」と名づけてしまったこの信仰の体系全体を表す言葉は，じつは彼らの著書の中ではほとんど現れない。この２書でそれがかろうじて現れるのは，おのおの１～２箇所のキリスト教への言及箇所であり，同時に王統（ミンゼッ）を持った民族（ルーミョウ）としてのカイン／クゥインという主張がもっともまとまって記されるのも，この箇所である。あるいはキリスト教という他者に関する表象を鏡として，自らの拠って立つ世界規範が意識されている，さらに自らの主張するところがもっとも濃厚となると考えれば興味深い。

以下ではウー・ピンニャからキリスト教への言及箇所を２箇所，ウー・ソオからはキリスト教への言及１箇所とそれ以外の部分からの計２箇所の記述を中心に，他の箇所から得た知見も取り込みつつ検討する。

第１節　ウー・ピンニャ

ウー・ピンニャにおいてキリスト教への言及は２か所でなされており，そのうち最初の箇所では自らの信仰体系については述べられていない。モン・カインの居住域の東側に住む，タイ族と比定され「ユン（ywûn）」と呼ばれる人々の呼称が，かつて「ヂュン（gywûn）」と発音されていたことを例証しようと，JESUS CHRISTとアルファベット表記のまま引き合いに出している(46)。「“主イエス（thakin yeishu）”という意の英語（ingalei' badha）をミャンマー

語（myanma badha）では“ye su'-khari”と翻訳して綴る」［Pyinnya 1929: 30］のであり，ye su'の“y”とJESUSの“J”（つまり“gy”）が音韻上，互換可能であるとする。このような引用の仕方からは，ウー・ピンニャがキリスト教についてある程度の知識を持っていたことが伺えるが，この宗教を何と呼んでいるかは明らかにされない。

これに対して２箇所目のキリスト教への言及箇所で，ウー・ピンニャにおいては数少ない自らの依拠する規範体系を表す言葉，そしてキリスト教を指示する言葉も現れる。それは３部構成の著書の文脈上，ウー・ピンニャがもっとも力を入れて描くモン・カインの王統記をひととおり記述し終えた第２部末尾，ごくわずかなミャンマー・カインの王統記を主題とした第３部直前であり，６段落構成の『第72節 特記事項（ahtû hpopyà je'）』のなかのことである。いわば，核心的な記述部分のまとめに当たる箇所であるといってよい。

この節の第１段落では，ルーミョウ興亡に関する歴史観が表明されている。そこでは，「いしにえのころには，おのおののルーミョウは自らのうちから徳（pôun），般若（pinnya），波羅蜜（paramî），タンバラー（thanbara）に優れたものが王として現れ，自ら（のルーミョウ）を統べたが，のちのちの世となると徳，力（le'yôun），智恵（nyan pinnya），波羅蜜に秀でたほかのルーミョウが統治と影響力を（そのルーミョウに）及ぼすようになるのが，避けられないものの道理（danmata thôunzan）である」とする。そして，自治を行っていたカインはやがてつぎつぎとシャンやユン，モン，ミャンマーのルーミョウの王の支配のもとに下り，これらのルーミョウもまた「勤勉で智恵を備え」そして「貪欲な」「ヨーロッパ大陸の人々（ùyôpà tai' dhâ）」に征服されるにいたる。このようにカイン・ルーミョウの王統（mînze'）は絶えて久しく，カインの言葉と文学（badha sape）でさえもなくなってしまったのである［*ibid.*: 140］。そしてウー・ピンニャは，第２段落で以下のように記す。

「今の時代（に属する）そう遠くない昔に，賢いキリスト教（khari’yan badha）の伝道師ら（thathana pyù dò）(47)が発明考案した“カイン文字”が出現した。このように，自らの独自の文字文学（sape yîn），本来の知識（mula pinnya）が失われてしまい，学問伝統（athin acâ）がなくなり，文字（sa）が受け継がれない時代が久しくなったがゆえに経典文学（sape pariya’）もなくなり，年代記王統記（mînze’ yazawin），説話（pounpyin），仏伝本生譚（niba’），詩（gabya），韻律詩（linga）などの古文書も絶えてなくなってしまったがゆえに，古来よりカイン語文字（kayin badha sa）はそもそもなかったと考えられるようになり，そのような古い書物，知識や王統記を知らないので，カインヂー(48)といえば“ソオケー”という程度だし，カインのあいだには王がいなかったなどと言われるようになってしまった。しかしながら，（みほとけの）御教え（thathana do）が失われたときに経典も失われたと広く言われてきたが，崇高なる迦葉仏（kathapà mya’zwa payâ）(49)の御正法（tayâ do）とされる経典の御教え（thathana do）は黄金の貝葉に書かれおかれ，（実際は）われらが崇高なる釈迦牟尼仏陀（gôtama mya’zwa payâ）の御代まで，アーラワカ羅刹(50)のもとで“ケイットゥダーウェィッタンプーリーターダーテーダン”などの経典の御正法（pariya’tì tayâ do）がのこされたのである。これとおなじように，カイン王統の年代記などの説話や伝記についての石碑印刻文や古文書，ほかの古い文献古い写本が残されているに違いないのだ。その証拠として，今このカイン王統記には“パオ・タウントゥ”の言葉（badha）で出会えたのであり，この古文書を根本において，ほかの古い文献古い写本，王統記，史書，もろもろを検討し（これを）書いてきたので，カイン語文字（kayin badha sa）によるカイン王統記もまたあるに違いないのだ。」［*ibid*.: 140-141］

このののち第３段落では，このカイン王統記に記したカインの王以外にも多くの王が存在したに違いないことを銘記すべしと読者に促し，そして第４段落では以下のように主張する。

> 「もしも，“カイン王統記の古文書”がなくて，知られておらず，カインの王もなかったと考えるならば，（それは）みほとけのルーミョウ（payâ lumyôu）がみほとけの徒ではない，羅漢のルーミョウ（yàhanda lumyôu）が羅漢ではない，あるいはいかなるルーミョウ（lumyôu）も人（lu）ではない（ということになり），波羅蜜を会得しているというみほとけの徒・羅漢の徒（payâ yàhanda）になるための修養をあますところなく修めたなら（それは）みほとけの徒・羅漢の徒たりうるわけで，一体全体どういうわけでカイン・ルーミョウ（kayin lumyôu）が王（mîn）なくして生き永らえてこられたのか，（いいやこれなかった）ということを，（いろいろと細々と，少しずつ）・・・書いてきた。」［*ibid*.: 142-143］

そして最後の第５，第６段落ではあらためて，自らを統治していたカインがやがてモンやミャンマー，ついでイギリス人の支配のくびきに陥っていってことをまとめ，仏典の韻律詩の一節を引用しつつ，ながきに渡ったモン・カインの二つの王統史を記した「カイン王統記第二部をここに終える」と締めくくっている。［*ibid*.: 143］

このようにウー・ピンニャは，モン・カインの王統史のまとめという脈絡の中で，ルーミョウを単位とした興亡史という史観を前提にして，カインの文字史料の喪失，疑問の余地のないカイン王の存在などを，仏教的イディオムを駆使して主張する。そこにおいて特徴的なのは，第１に，ウー・ピンニャはキリスト教の存在は知っているものの彼の意識においてはやはり周縁的，あるいは意識的に周縁に追いやられており，キリスト教はバーダー（badha）との言葉

を使って言及され，対する自らの信仰はおしえ＝タータナー（thathana）や正法＝タヤー（tayâ）などのことばで表現されることである。一般的に，宗教を表すビルマ語の語彙のうち，バーダーは相対的な意味での宗教，タータナーは仏教信仰を内在的な視点から表現する言葉とされる(51)。そして第２に，ルーミョウはタータナー世界を構成する基本的な人的単位で，ルーミョウは固有の王統のみならず独自の書き言葉・文字（バーダーサー），文学（サーペー），学問知識（ピンニャやアティンアチャー）なども備えている存在である。第３に，したがって，脈絡の上からも，そして「一体全体どういうわけでカイン・ルーミョウが王なくして生き永らえてこられたのか」という表現の上からも明らかなように，この王統記の主語はルーミョウの側に存してあるのであり，王権（ミン）はルーミョウたる条件という副次的な位置にある。

第２節　ウー・ソオ

ウー・ソオにおいて唯一のキリスト教への言及箇所は，全16章構成の本文のうち，第11章『モン王統記のサヤードーらの主張していることを抜粋し示し述べること』の末尾,『註釈（hma’hce’)』の項のあとに付された『特別註釈（ahtû hma’yan)』のなかでのことである。ウー・ソオにおいて,「註釈（hma’hce’あるいはhma’yan)」の項は毎章のごとくに現れて，記述の不足を補い，あるいはそれまでの文章のまとめをする役割を負っているが,「特別（ahtû)」と冠された註釈は，全体の中でこの一箇所のみであり，とくにウー・ソオの強い主張が込められていると考えられる。

文脈上, 先行する『註釈』項で, インドのコーリヤ・ルーミョウがミャンマーに来住してのちピュウ・カンヤン・テッの３ルーミョウに分かれ，このうちカンヤンがクゥインとなったとことをあらためてまとめている。このような文意ののち, 以下のように突然, クゥインにおける宗教（バーダー）について述べる。

「特別註釈：　ミャンマー国（myanma naingan）にはクゥイン・ルーミョウが多く居住しているが，その国の内のクゥイン・ルーミョウが信ずる宗教（badha）についていえば，仏教クゥイン（bou’dà badha kùyin）とキリスト教クゥイン（khari’yan kùyin）の２種があり，キリスト教信者のクゥイン（khari’yan win kùyin）はさておいて(52)，仏教クゥインの来しかた行くすえに思いを馳せるならば，“川の流れが砂の堆積によって消えるようには，民の流れは消えないものである（hkâun yô myâun yô tein ko ya ywe，lumyôu luyôu matein ko ya）”という謂れと同じく，太古の始祖においてクゥイン・ルーミョウがもともと釈迦族（thàcathakìya）の血脈正しいコーリヤの王統（koliyà nân yô）の流れを汲み，仏教の民（bou’dà badha lumyôu）であり仏教の王統（bou’dà badha mîn nwe）であり，今ではカンヤン（kân-yan）との名を得ているが，釈迦族の系譜は消えず，その流れは受け継がれているわけで，のちのちの世となっても民の系譜（amyôu anwe）の流れは途絶えることはないだろうといわれる。・・・・」［Saw 1931: 106］

こののち，クゥイン・ルーミョウのあいだで「今も」執り行われている「アヨウカウッブウェ（ayôu kau’ bwêi）」(53)という祭礼のなかの一儀礼で使われる「ミンガンドオ（mîngândo）」(54)が，かつて「ミャンマー全土の傘蓋配下におかれた王侯すべて」とその王族が死去した折の儀式に使われていた品物（あるいは，儀典，典礼，式次第）と同様のものであることが述べられ，やはりクゥイン・ルーミョウは血筋の正しい「コーリヤの王統（koliyà nân yô）」から出でたことが主張されて，この『特別註釈』の項が締めくくられている。［*ibid.*:106］

この引用箇所については３つの指摘をしたい。第１に，すでに明らかなように，ウー・ピンニャが自らの信仰を「タータナー」とか「タヤー」としてキリ

スト教を「バーダー」としているのとは対照的に，ウー・ソオは自らの信仰を「バーダー」と表現して「ボウダ・バーダー」と「カリヤン」を併置していることである。第２に，なかほどに見られる「諺れ」（あるいは「格言」や「ことわざ」）である「川の流れが砂の堆積によって消えるようには，民の流れは消えないものである」という韻を踏んだ印象的な一文は，この箇所のみならず，ウー・ソオの著書冒頭の『はじめに』第１ページ［*ibid.*: i］と，著書末尾の最終章の最後から２段落目［*ibid.*: 184］にも引用されている。いわば，連綿と続くクゥインというモチーフが込められたウー・ソオの『クゥイン御年代記』の主題を表現する役割を担っており，ウー・ソオの王統記においてもやはり，主語はクゥインというルーミョウである。そして第３に，このような連綿と続くルーミョウであるクゥインは，「釈迦族の血脈」をひく「仏教の民（ボウダ・バーダー・ルーミョウ）」「仏教の王統（ボウダ・バーダー・ミンヌウェ）」であり，この表現において象徴的に見られるように，「ルーミョウ」と「ミンヌウェ（王統）」は「ボウダ・バーダー（仏教）」という立地において概念的な結節がなされる。

だが第１の点について注意を要するのは，かといってウー・ソオにおいてみずからの拠って立つ世界規範が一貫して「ボウダ・バーダー」なる言葉で一括されているかといえばそうでもないことである。むしろ，「ボウダ・バーダー」という用法はこの引用箇所のみに見られ，「バーダー」は他宗教との対比という意図に喚起された局所的な語法と考えてもよい(55)。例えば最終章である，第16章『クゥイン・ルーミョウらがミャンマー国のうちにひろがり全土を満たしていたということを他のサヤーらの意見に拠って披瀝すること，ならびに第１巻の結び』の中には，つぎのような一節が見られる。

おおよそ３ページ半にわたるこの章の前半部分では，前述のとおり，著書を通じて何度も繰り返し描いてきたクゥインのミャンマー領域への来住史をふたたび概観し，諸地方の名前を列挙のうえ，西部，東部，そしてラーマニャ地方

にも広がり繁栄していった旨をまとめている。そしてこののち，執筆動機が開陳される最後の２段落（後述）直前で，以下のように記す。

> 「・・・このように，われらが釈迦牟尼仏陀（gôtama payâ）は，菩提樹とこがねの冠のうちに四聖諦（thei'sa lêba）(56)と御正法（mya' tayâ）をお知りになっておられ，正覚を得られて５年ののちにトゥーナパランタ国ワーネイッザガーマに巡錫あそばし垂訓されて正法（tayâ）を授けられた。（おしえを授けられた）良男５百良女５百を阿羅漢に授戒し，８万４千の優婆塞･優婆夷で解脱を得たなかには，コーリヤ皇統クゥイン王統（koliyà nân yô kùyin mînmyôu）があまた含まれていたといわれる。」［*ibid*.: 184］

この引用からも了解できるように，ウー・ソオの拠って立つところの原理体系は「四聖諦（テイッサー･レーバー）」とか「御正法（ミャッ･タヤー）」，「釈迦牟尼仏陀（ゴーダマー・パヤー）」などの用語を通してそこに暗示されているのみで，この限りではウー・ピンニャの態度とそう変わりはない。したがってウー・ソオにおける「バーダー」が仏教（ボウダ・バーダー）を対象とする使用例が見られる，あるいはキリスト教を「バーダー」とはしていないからといって，それを本質論化する必要はなく，ウー・ピンニャとウー・ソオともに「バーダー」を「宗教」の意で用いる語法を知っていたが，ウー・ピンニャはその語法により意識的であって，みずからの信仰体系には適用しなかったということであろう。

第３節　宗教・王権・民族

以上のように，その意識の周縁には「バーダー」によって規定されるキリスト教の存在も見え隠れするが，ウー・ピンニャとウー・ソオにとってカイン／

クゥインとは,「タータナー」や「タヤー」によって意味づけられる全体世界において,釈尊の教え「タータナー」を奉ずる王統「ミンゼッ」が過去になければ,「ルーミョウ」として存続できなかったような存在であった。このように両者は,仏教的王権を保持したルーミョウとしてのカイン／クゥインという同じ主張をしており,宗教＝王権＝民族という概念相互の関係性について,よく似た論理構造をもってその主張を基礎付けている。

第１に宗教と民族の関係から言えば,まず,ウー・ピンニャとウー・ソオのあいだにはたしかに宗教を表す語彙に若干の違いが認められる。しかし,他者たるキリスト教は無視といってよい扱いを受け,対する自己の信仰はほとんど意識されず,かろうじてあらわれる「タータナー」などの用語を通してうかがい知ることができるのみである。この点はソオ・アウンフラの著書との記述傾向と対比してみれば,いよいよ明確である。ソオ・アウンフラが固有性を本願とする民族の喪失,あるいはキリスト教に連なる信仰の剥奪という危惧をつねに抱えて「仏教」や「ビルマ」「モン」という異質な原理に属した他者との葛藤・抗争のうえにプアカニョウの歴史をつづるのにたいして,ウー・ピンニャとウー・ソオにとってはこのような意味での他者は存在しないか,はるかに周縁的で,カイン／クゥインの存在を安堵する仏教という唯一の原理がほとんど無意識に両者の記述世界に充ちている。そこに表現されたカイン／クゥインは独自であるよりは,他民族と始原と信仰を共有するような存在である。プアカニョウにおけるキリスト教は相対的・構成的であるのに対して,カイン／クゥインにとって仏教は絶対的で,その民族に内属する宗教[(57)]として扱われているということになる。この全体世界における基本的な人的集団単位はルーミョウであり,記述の主語もルーミョウとなる。しかし,このルーミョウには全体世界の縁限と一致した宗教的限界があり,民族的同胞と外部の視点からは規定されうる一角は,宗教的他者であれば基本的に黙殺されることになる。

このような民族と宗教によって規定される同胞＝他者関係に注目すれば,こ

こで当然の疑問が呈されることになる。執筆の背景となった1920年代から1930年代にかけてのビルマ社会では，植民地統治が深化して都市部ならずとも地方でも，多くのカイン／クゥインがキリスト教を信仰していることは知られていた。これらのカイン／クゥインをほとんど無視してまで仏教世界にカイン／クゥインを内在させる理由は何であったのか。あるいは，なぜ，宗教的他者を排除し，民族的同胞よりも宗教的同胞への連帯が優先されるのか。

第２に王権と民族の関係についてである。ウー・ピンニャにおいてはカインの４つの王統とその傍系に関する記述に溢れている。しかし，結局のところこの書の主人公はカインという民族そのものである。またウー・ソオについてもクゥインの太古の始祖についての解説に拘泥している分，クゥインの王の存在が抽象的になって構図としては見えやすくなっているとおり，やはりクゥインという民族がその記述の中心を占める主体となっている。ウー・ピンニャは「一体全体どういうわけでカイン・ルーミョウが王なくして生き永らえてこられたのか」と喝破し，ウー・ソオは「川の流れが砂の堆積によって消えるようには，民の流れは消えないものである」と執拗に繰り返す。つまり，２書ともにその内容は民族を主語とした民族史といってよい。そして，王権はあくまでもカイン／クゥインをルーミョウとして存立させるための条件として機能している。記述のうえでルーミョウが主語になるということは，この全体世界での主権的な存在がミンではなく，ルーミョウだということでもある。この点で２書における記述形式のうえから疑問を発せざるを得ない。

ソオ・アウンフラがその表題を「史書《li'M taLciFsoMtêsoM》」(58)としているのに対して，ウー・ピンニャとウー・ソオの著書タイトルには「王統記(yazawin)」の語を付してある。前述のように「ヤーザウィン」とはふつう，王や王朝を単位として各王の治績を記述し顕彰した史書である。では，王統記という形式のうえに民族史が語られるのは，ありうるべきことなのか。もしそうでなければ，このような王統記という記述スタイルと民族史という内実の二

重性を，われわれはいかに考えるべきであろうか。王朝が存在した19世紀まで，また植民地となった19世紀末以後，王統記を書き編纂するというのはどのような意義を持っていたのか。そしてウー・ピンニャとウー・ソオが王統記という形式を採用したのはなぜなのか。しかも，それをビルマ語で書くのはなぜか。

第３に，想定されるいまひとつの関係性，つまり王権と宗教に関しては，ウー・ピンニャもウー・ソオも多くは語らない。たしかにウー・ピンニャの著書には正法の体現者としてのセッチャー・ミン（転輪聖王）を最高位とした７階梯の王のランキングが解説されている箇所がある（第58節）。しかしこれも，カイン諸王（ヤーザー／ミン）のうちにこの７種の王いずれにもあてはまらない，あるいは凌駕すると観念されているシンバイン（shin bayin）が２人，つまりズウェヤー王朝のエインダとパアーワナ王朝のラスウェという２王統の２人の開祖がいたことを示すために引用されている。またウー・ソオには「ボウダバーダー・ミンヌウェ（仏教の王統）」という表現があったが，これもクゥインを主語としている限りで有効な表現であった。つまり，王権と宗教の関係性という点については，両書ともに寡黙・沈黙と性格づけてよい。

王権と宗教の紐帯に無関心であるのはどうしたことであろうか。そもそもタータナーが律する世界においてミンとは，理念的には，サンガという社会制度を擁護することをとおして，タータナーの庇護者であるべき存在であった。見返りにサンガは正法（タヤーあるいはダンマ）を護持する「正法王（ダンマラージャー）」として，その支配の正統性をミンに付与する，という相互関係が成り立っていた。上座仏教社会に共通する特徴としてつとに指摘されるところである［石井 2003a（1975）; 奥平 1994: 97］。しかし，ルーミョウに重心が置かれた両書の３者関係において，ミンとタータナーの関係はもっとも希薄になっている。

ここに検討してきたテキスト上の全体世界にたち現れてくる宗教・王権・民

族などの概念は，ウー・ピンニャとウー・ソオの生きたビルマ語世界の歴史的状況の中に基礎を持っている。信仰体系を指し示すタータナーやバーダー，仏陀に対するミャッズワー・パヤーという尊称，王権にまつわるミンやミンゼッ，ミンヌウェ，ナンヨウ，支配者が兼ね備えるべきポウンやピンニャ，パーラミー，タンバラーなどの徳質，人的基本単位としてのルーミョウ，その具体的構成員としてのカインやミャンマー，モン（タライン），シャン，ユンなど，あまたの語彙はすべて王朝時代のビルマ語世界から連綿として引き継がれたものである。これらの語彙にとどまらず，ルーミョウとしてのカイン／クゥインの王統・ミンゼッの存在の証明の仕方すらも，ビルマ語世界の諸概念の歴史的展開のうえに位置付けられそうである。すでに紙片がないが，これについてはいったんテキストを離れてビルマ語の意味世界の歴史的過程において，これらの概念がどのような内実をもって使用され，あるいは変容してきたかを検討する必要があろう。

おわりに

以上，ビルマ植民地期末期に出版されたふたつのカレン史を素材として，仏教徒カレンの民族意識の顕在化過程解明という問題意識を射程に置きながら，本稿ではまず，「キリスト教徒カレン」と「仏教徒カレン」という存在の問題性を緒言的に考察し，そのうえで２人の仏教徒著者の位置づけ，そして２つのテキストの主張と論理という基礎的条件を明らかにすることを課題としてきた。

ふたりの仏教徒著者が出版という手段に訴えてまで主張しようとしたのは，カイン／クゥインという存在がこのビルマ世界の一角を占めるべき正統な一員である，ということであった。この正統性の証明は，ビルマやモンなど他の仏教的王権が存立してきたビルマ世界において，カイン／クゥインもまた同様の

仏教（タータナー）を信奉する王権（ミン）を過去に保持していた民族（ルーミョウ）であるという論理によって完遂されるべきものであった。それは，このビルマ語で書かれたカレン史書を読むビルマ語話者にとって，ルーミョウの正統性の主張がそのようなタータナー＝ミン＝ルーミョウ関係によって支えられてこそ説得性を持つものであったということを示唆している。そうであればこそ，この３概念間の関係性を歴史的位相に照らし合わせて，もろもろの疑問が発せられることになった。同じルーミョウでありながらキリスト教徒への顧慮が払われないこと，民族史という内実を王統記という形式に託したこと，そして伝統的なタータナー＝ミン関係が希薄なこと，などであった。したがって，これ以降に取り組むべきは，キリスト教徒著者ソオ・アウンフラによるカレン史の検討とともに，以上のテキストの主張と論理に関する考察の結果からじかに導き出される，以下の２つの課題となる。

第１に，テキストを包み込む歴史世界，わけても王朝期から植民地期にかけて，18世紀末から20世紀初頭までのビルマ語世界という歴史的文脈，歴史的コンテキストの中にテキストを定位するということである。これらふたつのカレン史書に根幹的な宗教・王権・民族という諸概念がどのように涵養され，生成変容したかを概要であっても把握し，テキスト上の概念との異同・対応・齟齬を検討せねばならない。そのうえで第２に，テキストと歴史的コンテキストの出会ったところ，すなわちこのビルマ語世界に既存していた概念を流用・利用して主張を展開しようとした執筆動機の生まれた，よりミクロな1920年代から30年代にかけての社会的コンテキストを考察する必要がある。このような，テキストが紡ぎだされた２つのコンテキストでの考察を通してのち，20世紀初頭のビルマにおけるカレン諸語を話す仏教徒カレンの間で民族意識がどのように養成され，発露したかがふくらみをもって理解できよう。ここでは，これら２つの点についての見通しをごく簡単に述べて本稿を締めくくりたい。

まず，主張の論理を歴史的文脈に求めてみると，２書におけるルーミョウと

してのカレンの主張の背後には，ビルマ社会の民族化ともいえる潮流があるだろう。それには,19世紀末の王権の消滅とタータナーの危機が重要な要因となっているはずである。とくに19世紀末より20世紀にかけていつくかの波を形成して起こった農民反乱におけるイディオムの変化［例えば，伊東 1994; 2003; 伊野 1998などを参照］には，それが明確に見て取れる。当初，ミンという主権者の再来を望みタータナーの復興を期した運動はやがて，ミャンマーという形象を主体的に担うルーミョウを主権者とした運動に変質している。そのようなプロセスの結果，20世紀初頭にはルーミョウを社会の構成原理として，政治の編成単位として，思考の物差しとして，歴史理解の尺度として，そして主権的ななにものかとして，つねにルーミョウを意識する社会が断絶を感じさせることなく成立していた。従来からあったミンやタータナーといった観念は，このプロセスの中で，彼らにとっての全体世界を説明する際の原理としてはその機能を変容させた。主権者としての，価値の源泉としてのルーミョウに正統性を付与し，連綿とした過去を保障する条件として，ミンとタータナーは再定義された。ウー・ピンニャとウー・ソオのカレン史には，このようなビルマ語世界における宗教＝王権＝民族観念の20世紀的なありかたが投影されている。むしろ，ルーミョウに重心のある３者の鼎立構造のなかにカレンを位置付けることこそ，ビルマ語世界におけるカレンの正統性の主張にとって枢要かつ不可欠なものであったいえる。では，このようなビルマ社会におけるルーミョウについての了解に見合う論理を備えた主張がなぜ，なされたか。

それは，1920年代までの「カレン」を取り囲むビルマ植民地の社会的文脈が作用しているものと考えられる。このことを明らかにするために，ウー・ピンニャ著書の後書きにその執筆動機と絡めて言及されている，当時のビルマ語全国紙トゥーリア紙上で議論された「映画とカイン」論争を具体的な素材として考察することになる。この論争は，このころビルマで上映された映画においてカレンが野卑な民族として描かれていたことに苦言を呈した，あるカレン女性

の投書が掲載されたことに端を発している。これ以降半年以上にわたって，カレンとビルマ民族を名乗る論者双方の投書35本前後によって，「カレンは野蛮な民族か否か」を論点として議論が交わされた。カレンとビルマ民族を自覚する論者によってさまざまに論せられる，植民地ビルマにおけるカレンの過去と現在を分析することにより，カレンがいかなる人々として自己表明され，受け取られていたか，そしてやがては，仏教徒カレンが何ゆえに民族としてこの時期に自己主張を始めていたのかが，明らかにされるだろう。

1　ビルマ語は奥平龍二氏考案の方式［The Burma Research Group 1987: 18］，スゴー･カレン語は藪司郎氏考案の方式［藪 2001b: 526-531］を使用し，スゴー・カレン語翻字のみ《pgaMkaňô》のように二重山括弧でくくってビルマ語翻字と区別する。国名・地方名・地名，民族名，人物名などの固有名詞の英語表記の多くは必ずしもこれに従わず，慣行上許容されている表記に準拠して大文字からはじめる。民族の呼称について，カレン（Karen），カレン人，カレン族，カレン民族などを標準的に使用する。ビルマ語他称ではカイン（Kayin）やクゥイン（kùyin），スゴー・カレン語自称のプアカニョウ《pgaMkaňô》，西ポー・カレン語自称のプローン（Phloung:），東ポー・カレン語自称のプローン（Phloung）となる。またカレンを構成する言語的なサブ・グループとして，まず，スゴー（Sgaw ／ Sgau ／《cgôM》）とポー（プォー Pwo ／ Pgho ／《pgoL》）は，ビルマ語他称でも同様にスゴー・カイン，ポー・カインと呼称される。現在では古風に聞こえるが，おのおのミャンマー（バマー）・カインとモン（タライン）・カインとも呼ばれる。スゴー語ではスゴーをパーティ（《paLthi'M》「父方」の意），ポーをモーティ（《moLthi'M》「母方」の意）と一般的に呼称する。いまでは別個の民族として数えられ，言語系統としてはカレンに分類されるパオ（Pao）は自称であり，ビルマ語でタウントゥ（Taungthu，「山の人」の意）とも呼称されるが，蔑称とされ一般的には使用が避けられる。カレンニー（Karenni）はビルマ語でカインニー（Kayinni，「赤カレン」の意），自称でカヤー（Kayah）となる。パダウン（Padaung）もビルマ語他称で，自称はカヤン（Kayan）となる。また，ブゲェー（Bwe ／ Bghai ／《bhgê》）は自称，あるいはスゴー語他称と思われるが委細は不明。ビルマ民族は基本的にビルマ族，ビルマ民族などを使用し，自称のバマー（bama），ミャンマー（myanmar），ミャンマー族，

ミャンマー民族を使うこともある。スゴー語他称はパヨー《payôM》である。なお,「民族としてのビルマ人」と「国民としてのビルマ人」の英語表記については注意を要する。19 世紀から 20 世紀半ば過ぎまでは,Burmese を「民族としてのビルマ人」,Burman を「国民としてのビルマ人」とする用法が多数派であったようである。しかし現在ではまったく逆の用法が定着している。

2　yazawin は「王統記,王統史,年代記」,maha は「大きな,巨大な」,do は尊いものに後接する接尾辞,jî は「大きな」をそれぞれ意味する。ウー・ソオの kùyin maha yazawin dojî は「クゥイン御大王統記」などとも訳しうるが,ウー・ピンニャ著作との区別を考慮し「クゥイン御年代記」と訳出した。

3　これにはさまざまな異型が存在するが,共通するストーリーの骨格は,カレンの伝説的神格である「ユワ(Ywa)」が去るにあたってカレンに黄金の本を授けたが喪失してしまった,しかしカレンの弟である「白い人」がこの本を携えやがて帰ってくる,というものである。米人宣教師は初期の接触の中で,宣教師を「白い人」,彼らの携えた聖書や祈祷書などの書物を「失われた本」と見なすカレン側の熱烈な待望に遭遇し,これがカレンによるキリスト教の大規模受容の土壌となったとされる。このようなタイプの伝承は,なにもキリスト教を受容したカレンらのみに見られるものではなく,仏教を受け入れたカレン[Womack 2005: 69]や中国南部のミャオ,ビルマ北東部からタイ北部のラフ[片岡 1998]などのあいだにも見受けられた。

4　ポー語はスゴー語と比べて方言差が大きく,とくに東部テナセリム地方と西部イラワディ・デルタ地方では互いに意思疎通ができないほどに異なっている。

5　このような書物のうち,ウェイドによる『カレン知識の宝典(Thesaurus of Karen Knowledge)』[Wade 1847-1850] と題された最初のスゴー語辞書 4 巻組みと,最初期の宣教師メイソン(Francis Mason)による『ビルマ,その民と自然産物(Burmah, its People and Natural Production)』[Mason 1860] が,民族としてのカレン理解について果たした役割は重要である。前者は語彙の集成という通常の辞書の性格を越えてまさにカレン知識の百科事典的な集大成を企図したものであり,後者は下ビルマに産したあらゆる事物を博物誌的に網羅するなかに,カレンを民族として体系的に叙述しようとする最初の試みであった。

6　19 世紀後半にビルマに植民地官僚として赴任した英人らは,このような米人バプティストにまずカレンについての知識を求め,そのカレン観を踏襲したカレンについての記述を残すことになった。1860 年代後半にタウングーの県知事としてこの地に赴任してきたマクマホン(A. R. McMahon)は,この地に

長く居住していたメイソンにその著書の最も大きい部分を負っていることに感謝の意を表明している［McMahon 1876: iv-v］。同様のメイソンへの献辞は，19 世紀末植民地ビルマの財務長官の地位にあったスミートンの著書［Smeaton 1887］にも見られるところである。

7　これらカレン仏教も含めてビルマ語とカレン語の出版物に関しては，ヤンゴン大学図書館情報学部にディプロマ論文として提出された，カレン関係の書誌目録［Nilar Tin 1991; Aung Thein 1999 など］に詳しい。

8　ウー・ピンニャのオリジナルと異同を比較すると，序言にウー・ピンニャを共同執筆者として紹介しているほか，著書最末尾の 2 ページ分がウー・ピンニャの原著と異なる。おそらくオーバータ師が編纂の底本とした原著の最終紙片（177 ～ 178 ページ）が紛失し，オーバータ師が独自に書き足したものと思われる。1929 年オリジナルの再版とも言及しておらず，そのままではオーバータ師の著書としか見えない。

9　スターン［Stern 1968］ら人類学者が，参与観察の許されなかったとくにタイ＝ビルマ国境山岳地方のビルマ・カレンについて，むしろ周縁からの視点を旨としてバプティスト宣教師文書を主たる史料として研究を行ってきた。

10　レーケーとテラコンは，下記のよりオーソドックスに近いカレン仏教とおなじ土地で活動していた。1860 年代以降のパアン平野地方の宗教状況を明らかにする研究が待たれる。

11　仏教ポー・カレン文字（Pwo Karen monastic script）を言語学の立場から見ると，そこには強いモン文字の影響が見られ，「プォー（ポー）・カレン語東部方言の話し手に対して説法していたモン族の僧侶，あるいは，モン語を学んだプォー（ポー）・カレン族の僧侶の考案によるものと考えられ」るという［藪 2001a: 253］。他にも 1832 年にバプティスト派宣教師のウェイドによって考案されたキリスト教スゴー・カレン文字（Sgaw Karen mission script），同じくウェイドによって 1830 年代に考案され 1852 年にバプティスト宣教団に正式に採用されたブレイトンのキリスト教ポー・カレン文字（Pwo Karen mission script）があり，さらにはキリスト教スゴー・カレン文字との対抗で作られたと考えられる仏教スゴー・カレン文字（Sgaw Karen monastic script），そして「鶏の足掻き文字（ライサンホエ）」と呼ばれるレーケー文字（Laikai / Leke script）などがある。

12　この研究は，1968 年にヤンゴン大学歴史学部にビルマ史家タントゥン（Than Tun）の指導のもと提出された修士論文に原型がある。ポーンミン自身が筆者

に語ったところによると自身は「ビルマ化されたモン人」で，この修士論文執筆のためにパアン地方の僧院をいくつも訪れ滞在し貝葉文書を収集した。

13　ポーンミンによって内容が「歴史」に分類されている貝葉は，1942 年にウー・パーラマ（U Parama）によって書かれた Slapatthutalinga の 1 包のみである。これは 1957 年に書籍として出版され，2003 年にも再版されているが，一見して内容は説法集で歴史的な記述は見当たらない。

14　「カイン王統史」の主たる典拠となった「パオ語の王統記文書」の発見の経緯を述べるくだりで，幼馴染であるシャン人の僧院住職のサヤードーに 1908 年に会いに行ったとあり，同年代が僧院住職であるほどであれば，ウー・ピンニャもこの時，壮年期にあったろうと推測される。

15　詳しい書誌情報は不明。

16　1931 年センサスによれば 22 万 3 千人ほど。

17　1920 年代のおわりにすでに，手漉き紙といえばマインカインの紙，というイメージがあったらしい。今日ではそのブランドは確立していて，たとえマインカインの紙ではなくてもシャン州産の紙を呼び習わす代名詞，あるいは普通名詞となっている。シャン州では 19 世紀にすでに貝葉よりも紙で各種文書が多く書かれていたという［飯島 2004: 119-120; 2007: 96］。

18　タウントゥ（Taungthu）はパオのビルマ語他称。「山の人」の意。

19　1 タバウンは 1.5 フィート = 18 インチ，1 レッマは 1 インチを表す度量衡。

20　プー・タマイッの僧号も「ナンダマラ」である。

21　とはいえ，本文には「ギリシャやイタリアの古典」については具体的言及が見当たらない。

22　具体的な書誌情報が記載されていないが，［Saw 1931: 62］には Hara Prasad Shāstrī の文献［おそらく Shāstrī 1909; 1904/1923/1925 など］，［Saw 1931: 65］に A. F. Rudolf Hoernle によるインド史［おそらく Hoernle 1909 のこと］，［Saw 1931: 68］にはベンガル知識人であった Romesh Chunder Dutt の文献［おそらく Dutt 1893; 1895; 1909; 1917 のいずれか］が紹介されている。なお，ウー・ソオ原文にはビルマ語音写の著者名しか記載されておらず，特定には東京大学準教授井坂理穂氏のご助言を頂いた。記して感謝申し上げたい。

23　このような記述の傾向にウー・ソオ自身も気づいていて，何度も言い訳をしている。最後には，将来的に執筆する予定の第 2 巻で本書の不足を補うことを約するが［Saw 1931: 183］，結局，この第 2 巻は出版されなかった。

24　例えばラングーン市内のビルマを代表するパゴダ，シュウェダゴンの南麓参

道入り口には，ビルマ語で「カイン・ビダカッタイッ（カレン三蔵経庫院）」との名称が掲げてあるカレン僧院があり，1930年前後に開かれている［池田2007: 74-76］。

25　ほかにも，『旧パガン王統史（Pagan yazawin haun）』（16世紀），『出生票聚王統史（zatadawbon yazawin）』（17世紀），『中王統史（yazawin la'）』（18世紀），『摩尼宝珠聚典（mani yadanabon cân）』（1781年），『新パガン王統史（Pagan yazawin thi'）』（1785年），『新王統史（maha yazawin thi'）』（1798年），『モンユエ王統史（rajinda rajavara mandani）』（19世紀），『第二王統史（dutiya maha yazawin）』（1867年），『マンダレー宝聚大王統史（Mandalay yadanabon maha yazawin dojî）』（1891年），『改訂大王統史（thuthodhita maha yazawinjî）』（1922年），『多宝コンバウン王統史略（yadanathikha Konbaungzet yazawin jo'）』（1935年）などがある。［大野1987］

26　「コンバウン王朝年代記」は20世紀初頭に書かれたが，編著者はコンバウン朝の元高官で，王朝の正統性の主張という点では伝統的な王統記に属する。

27　20世紀に入ってからの「少数」民族の王統記編纂という点については，他にも類例が多く見られる。例えばシャンには『センウィ王統紀』や『ウンポン・スィーポ王統記』［新谷2008］，『チェントゥン国年代記』［Saimong Manrai 1981］など，アラカンでもいくつかの王統記が書かれている。だが，先行研究がほとんどなく，むしろ本稿をもってしてこのような研究領域の第一歩とするつもりとしたい。

28　目次の章立てならびに本文でのナンバリングにも混乱・齟齬があり，実質は序と結を含めて70節構成である。

29　あるいはタライン・カイン（Talaing Kayin ／ tàlâin kayin）。

30　ここで引用されているタウントゥがカレン系のパオを指すかどうかは定かではない。

31　外国人，あるいはインド人の意。

32　ビルマ語における子音yには二種類あるが，kayinで使われるyはrの音価も持つ。

33　この説明は［McMahon 1876: 45-46］にも，メイソンの論文を引用して紹介されている。

34　現在でもビルマ語では一般的にスゴー・カレンをミャンマー・カインあるいはバマー・カイン，ポー・カレンをモン・カインまたはタライン・カインと呼ぶ。だが，シャン族に近しい関係を持つカインとして描かれ現在ではカヤー（カ

レンニー）と比定されるこの人々が，シャン・カインと呼ばれることはないようである。

35　ヨーダヤーは，現代ビルマ語では隣国タイとその民族を示す。一般的理解ではヨーダヤーの存在はこれほどに古くはない。

36「ミョウ」は「砦」や「市」「町」などと訳出されるが，基本的には防護壁や柵に囲まれた居住単位。

37　ミャワディは現在，タイ＝ビルマ国境でタイ側の町メーソットに面して国境貿易で有名な町である。

38　章割りのナンバリング上，7 章が欠落しており，かわりに 4 章のつぎに「4 章— Kà（ビルマ語字母の最初の文字, いわば「いろはにほへと･･･」の「い」)」という章が配されており，全部で 16 章はかわりない。

39　ラングーンの古称・雅称。

40　とはいえ，表記上 kùyin とあっても発音上は kayin と同様にカインとされていたと考えてよい。それは，ビルマ語話者であれば誰であれすぐに，よく似た綴りの kùla（ကုလား）という「インド人，外国人」を意味する語が，実際はカラー（kala）と発音されることを想起させるからである。このことは，ウー・ソオが kùyin という綴りにこだわる別の理由，あるいは仮説に我々を導くことになる。ウー・ソオはミャンマーとモンをはじめとして，カレンを含めたミャンマー領域の諸民族の起源をインドに置き，かつ釈尊生誕の地として格別の地位をインドに与えている。このように考えれば,「カラー」のタチャウギンに連なる「クゥイン」に付されたタチャウギンもまた，権威ある表象としてのインドにカレンを結節させるための装置であると言えよう。

41　ウー・ピンニャの解説にもあるとおり，この民族名は「赤い（ni)」「カイン（kayin)」との意であり，であるならばウー・ソオ流にはクゥインニー（kùyin ni）としてよさようである。しかし，カインニーと通常の表記のままである。

42「傘（htî)」はビルマにおける王権の象徴である。

43　アラカン（ヤカイン）の古都。

44　既述のとおり，パオはこの民族の自称，タウントゥはビルマ語他称とされる語であり，同一民族を指す語とされる。しかしこの箇所も含めてウー・ソオは別民族の扱いをしている。

45『玻璃宮御年代記』のクウェ，グウェ，ウェは，ウー・ピンニャの著者でもクウェ・カインすなわちミャンマー・カインとして言及されている。

46　ちなみに同じ箇所で, 日本を gyapan, gyepan, zapan などとも綴りうると言っ

ている［Pyinnya 1929: 29］。

47　通常，「伝道師」は「タータナー・ピュウ・サヤー（thathana pyù hsaya）」が使われる。thathana は「おしえ」，pyù は「広める」，hsaya は「先生」の意。キリスト教宣教師に「先生」を付けたくなかったのか hsaya が欠落している。また thathana は一般的に仏教に対して使われる語である。ここでは，仏教徒が一般に使う「伝道師」の語がキリスト教宣教師をあらわす語に流用され，結果的にキリスト教に対して thathana が適用されている。

48　直訳すれば「大きいカイン」であり，「カインの長」の意。「ソオケー」はカインの伝統的な首長の呼称である。

49　過去仏のひとつで釈迦牟尼より一代前の仏陀。

50　釈尊により調伏されたとされる。

51　そもそもビルマ語世界には，「バーダー」を宗教の意味で用いる語法はなかった。バーダー（badha）はパーリ語の「バーシャー（bhāsā）」を語源としており，「言語・語話・談・言説・論議」［水野 2005: 245］を本義として，タイ語では「パーサー（phaasǎa）」，マレー語では「バハサー（bahasa）」，ネパール語で「バーシャー（basha）」となり，いずれも「言葉」という意味でしか使われない。植民地期においても，公的な性格をともなったビルマ語の諸王統記や仏典，詔勅，農民反乱の宣言文には「バーダー」＝「仏教」の使用例はほとんどなく，自己の信仰を内在的な視点から表現する語は一般的には「タータナー」となる。語源のパーリ語「サーサナー（sāsana）」の本義は「教，教説；信書，使書，通牒」［同上書 : 353］。「バーダー」に宗教の含意ができるのは 18 世紀末から 19 世紀はじめのことらしく，今日では仏教を「ボウダ・バーダー」，キリスト教を「カリヤン・バーダー」，イスラム教を「ムスリム・バーダー」などとする用法は一般的である。

52　このように述べてから，ウー・ソオは二度とキリスト教クゥインには戻ってこない。

53　この「アヨウカウッブウェ」については，ウー・ピンニャの著書の中でも言及がある［Pyinnya1929: 92］。

54　王室儀礼の際に左右に置かれる置物。あるいは，儀典，典礼，式次第。

55　キリスト教にはたまたま「バーダー」の語が使われていない。「キリスト教（カリヤン khari'yan）」はこの書物を通してこの箇所で２度使われているだけで，一般化するだけの量的使用例がない。文の流れの上でたまたま「バーダー」を使わなかっただけ，と見るべきであろう。むしろ，仏教（ボウダ・バーダー）

とキリスト教が併置されていることに注目すべきである。

56　苦諦，集諦，滅諦，道諦の４つ。

57　石井はタイ国諸憲法における仏教の規定を検討するにあたり，それを「タイ民族という概念に内属した宗教」と敷衍し，「すなわちタイ人にとって，タイ族と仏教徒は同義語であり，仏教徒であることは，タイ人としての資質の一部であると考えられている」[石井 2003a (1975): 65]とする。ウー・ピンニャとウー・ソオにとってのカイン／クゥインの仏教もまた同様のものとしてたちあらわれている。

58　字義通りには「歴史の本」。

参考文献

1.　ミャンマー国立公文書局（NAD）所蔵史料

1/1(A) 181　　Karen Minlaung in Yunzalin.

2.　ビルマ語文献

Aung Chain, Saw. 2003. *tâinyîndhâ kayin lumyôumyâ î thamâincâun yincêihmu hnîn kayin pyine thamâinhpyi'zinacîin*. ［原民族カインの歴史･文化とカイン州小史］Yangon: sêinyaunshein sapeitai'

Aung Thein, Saw. 1999. *kayin pyine sasùsayîn*.［カイン州に関連する書誌目録］ヤンゴン大学図書館情報学部提出ディプロマ学位論文

Hpoun Myint, U. 1975. *bou'dabatha pôukayin peiza thamâin*. ［仏教徒ポー･カレンの貝葉文書の歴史］ Yangon: thàpyeûsapetai'

Lin Myat Kyaw, Mahn. 1970. *thìhma'bwe kayin yôuya*. ［カイン文化の記録］ Yangon: shweimôu sapeiyei'tha.

——————. 1980. *kayin yôuyathùtapadeitha*. ［カイン慣習文化の集成］ Yangon: sapeilôkàpounhnei'tai'.

Loung Khin, Mahn. 1965. *zwêkabin zeidi thamâin*. ［ズウェカビン仏塔縁起］ Maulamyain: n.p.

Nilar Tin, Ma. 1991. *kayin tâinyîndhâ hsain ya sasùsayîn*. ［原民族カインに関連する書誌目録］ヤンゴン大学図書館情報学部提出ディプロマ学位論文

Obatha, U. 1961. *kayin yazawin*. ［カイン王統史］ Maulamyain: hlya'si'pounhnei'tai'.

Paw, Thra Saw. 1983. *kayin ì mulàzi'myi' (The Roots of Karen, Part 1.)* [カインの起源] Yangon: n.p.（カレン民族新年祭開催委員会）

Pyinnya, U. 1926. *thatoun yazawin paûnjou' jî*.［タトン王統記集成］

——————. 1929. *kayin yazawin*.［カイン王統史］ Yangon: thurìyà thadîzatai'

——————. 1965. *kayin yazawin*.［カイン王統史］ Yangon: zwêisapei.

Pyinnya Thuta, U. 1961. *kayin lumyôu hnîn bou'dà yincêhmu yazawin*. [カイン民族と仏教文化王統史抄] Yangon: mìbàmi'tashweizei'pounhnei'tai'.

Saw, U. 1931. *kùyin maha yazawin dojî*.［クゥイン御年代記］ Yangon: amyôthâ sapounhnei'tai'.

Than Tun, Dr. 2001. *myanma thamâin nìdân*. ［ミャンマー史入門] Yangon: Myanmar

Heritage.

Thin Naung, Mahn. 1978. *ashèi pôu kayin*.［東ポー・カレン］Yangon: sôumôumei'hse'.

————. 1981. *kayin pyine ahlà*.［カイン州の美］ Yangon: sapeilôkàpounhnei'tai'.

————. 1984. *myòu pâan*. ［パアン市］ Paan: cohtwûnsapei.

Thuriya Dadhinza ［*The Sun Newspaper*］ （"TD" と略記）

Thuweizadara, Ashin. 1963. *kayin yazawin*. ［カイン王統史] Yangon: te'lungesapei.

Tun Yin, Mahn. n.p. (1960's?). *kùyin yazawin acînjou'*. ［クイン王統記抄］ Yangon: n.p.

Zagara, U. 1966. *zwêkabinpay â thamâin thi'*.［ズウェカビン寺院新史］ Yangon: n.p.

3.　カレン語文献

Aung Hla, Saw. 1939. *pgaMkaňô ali'M taLciFsoMtêsoM* ［The Karen History.] Bassein: The Karen Magazine Press.

Wade, Jonathan, and Sau Kau-Too. 1847-50. *Thesaurus of Karen Knowledge, Comprising Traditions, Legends or Fables, Poetry, Customs, Superstions, Demonology, Therapeutics, etc., Alphabetically Aarranged and Forming a Complete Native Karen Dictionary, with Definitions and Examples, Illustrating the Usages of Every Word*. Tavoy: Karen Mission Press

————. 1849. *A Vocabulary of the Sgau Karen Language* Tavoy: Karen Mission Press.

4.　英語文献

Brown, David. 1994. *The State and Ethnic Politics in Southeast Asia*. London and New York: Routledge.

Burma. 1986. *Burma, 1983 population census*. Rangoon: Socialist Republic of the Union of Burma, Ministry of Home and Religious Affairs, Immigration and Manpower Dept.（"1983 Census"と略記）

The Burma Research Group. 1987. *Burma and Japan: Basic Studies on Their Cultural and Social Structure*. Tokyo : Burma Research Group [ビルマ研究グループ事務局]

Dutt, Romesh Chunder. 1893. *A brief history of ancient and modern India*. Calcutta: S.K. Lahiri & Co.

———. 1895. *A brief history of ancient and modern India, for the use of schools*. Calcutta: S.K. Lahiri & co.

———. 1909. *A brief history of ancient and modern India, according to the syllabus prescribed by the Calcutta University*. Calcutta: Lahiri.

———. 1917. *The economic history of India under British rule, from the rise of the British power in 1757 to the accession of Queen Victoria in 1837*. Trubner's oriental series. London: K. Paul, Trench, Trubner & Co.

Enriquez, C. M. 1924. *Races of Burma*. Handbooks for the Indian Army. Calcutta: Government of India Central Publication Branch.

Government of Burma. 1912. *Census of India, 1911 Volume IX Burma*. Rangoon: Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.

———. 1917. *Linguistic Survey of Burma: Preparatory Stage or Linguistic Census*. Office of the Superintendent, Government of Burma. Rangoon: Government Printing.

———. 1923. *Census of India, 1921 Volume X Burma*. Rangoon: Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.

———. 1930. *The Quarterly Civil List for Burma. No.CCXL. Corrected up to the 1st July 1930.*. Rangoon: Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma. （他にも1910年代～1940年代のCivil List各号参照）

———. 1933. *Census of India, 1931 Volume XI Burma*. Rangoon: Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma. （"1931 Census"と略記）

Grant, R. Brown. 1911. "The Linguistic Survey of India" *Burma Research Society's Journal*. Vol.i, Part i: 17-23

Gravers, Mikael. 2001. “Cosmology, prophets, and rebellion among the Buddhist Karen in Burma and Thailand.” *Moussons* Vol.4. pp.3-32. (Institut de Recerche sur le Sud-Est Asiatique, Universitè de Provence).

Hayami, Yoko. 2004. *Between hills and plains power and practice in socio-religious dynamics among Karen*. Kyoto area studies on Asia, v. 7. Kyoto, Japan: Kyoto University Press.

Hoernle, A. F. Rudolf, and Herbert Alick Stark. 1909. *A history of India*. Cuttack: Orissa mission Press.

Koenig, William J. 1990. *The Burmese Polity, 1752-1819: Politics, Administration, and Social Organization in the Early Kong-baung Period*. (Michigan Papers on South

and Southeast Asia, No.34.) Center for South and Southeast Asian Studies, The Michigan University.

Lowis, Cecil Champain. 1919. *The tribes of Burma*. Rangoon: Office of the Supt., Govt. Printing, Burma.

Mason, Francis. 1852. *The Natural Productions of Burmah, or Notes on the Fauna, Flora, and Minerals of the Tenasserim Provinces, and the Burman Empire*. Maulmain: American Mission Press.

――――. 1860. *Burmah, its People and Natural Productions : or, Notes on the Nations, Fauna, Flora, and Minerals of Tenasserim, Pegu, and Burmah, with Systematic Catalogues of the Known Mammals, Birds, Fish, Reptiles, Insects, Mollusks, Crustaceans, Annalids, Radiates, Plants and Minerals, with Vernacular Names*. Rangoon: Thos. Stowe Ranny.

――――. 1870. *The Story of a Working Man's Life: With Sketches of Travel in Europe, Asia, Africa, and America, as related by himself*. New York: Oakley, Mason & Co.

――――. 1883. *Burma, its People and Productions : or, Notes on the Fauna, Flora and Minerals of Tenasserim, Pegu and Burma*. (rewritten and enlarged by W. Theobald.)

McMahon, Alexander Ruxton. 1876. *The Karens of the Golden Chersonese*. London: Harrison.

Pe Maung Tin. 1923. *The Glass Palace chronicle of the kings of Burma*. (translated by Pe Maung Tin and G.H. Luce.) London: Oxford University Press.

Renard, Ronald D. 1980. *Kariang: history of Karen-T'ai relations from the beginnings to 1923*. Thesis (Ph. D.) –University of Hawaii.

Saimong Mangrai. 1981. *The Pādaeng chronicle and the Jengtung state chronicle transland.* Michigan papers on South and Southeast Asia, no. 19. Ann Arbor: University of Michigan, Center for South and Southeast Asian Studies

Scott, James George, and J. P. Hardiman. 1900. *Gazetteer of Upper Burma and the Shan Shan States*. Rangoon: Printed by the superintendent, Government Printing, Burma.

Shāstrī, Hara Prasad., and et al. 1909. *Six Buddhist nyaya tracts in Sanskrit*. Bibliotheca Indica, N.s. no. 1226. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

Shāstrī, Haraprasad. 1904/1925/1928. *A descriptive catalogue of Sanskrit manuscripts in the Government collection under the care of the Asiatic Society of Bengal*. Calcutta:

The Asiatic Soc. of Bengal.
Shavit, David. 1990. *The United States in Asia: A Historical Dictionary*. New York: Greenwood Press.
Shwe Wa, Maung. 1963. *Burma Baptist chronicle*. Rangoon: Board of Publications, Burma Baptist Convention.
Silverstein, Josef. 1960. *The Struggle for National Unity in the Union of Burma*. Ph.D. Dissertation, Cornell University.
――――. 1980. *Burmese politics: the dilemma of national unity*. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press.
Smeaton, Donald Mackenzie. 1887. *The Loyal Karens of Burma*. London:Kegan Paul, Trench & Co.
Soothill, William Edward. 1929. *A history of China*. Benn's sixpenny library, no. 15. London: E. Benn.
Steinberg, David I. 1982. *Burma: A Socialist Nation of Southeast Asia*. Colorado: Westview Press.
Stern, Theodore. 1968. "Ariya and the Golden Book: A Millenarian Buddhist Sect Among the Karen." *The Journal of Asian Studies*. Vol. xxvii, No.2 (Feb, 1968):297-328.
Womack, William Burgess. 2005. *Literate networks and the Production of Sgaw and Pwo Karen Writing in Burma, c.1830-1930*. (Ph.D. Dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London.)
Zan, U, and E. E. Sowards. 1963. "Baptist Work for Among Karens." in *Book II, Burma Baptist chronicle*. edited by Genevienve Sowords and Erville Sowords. pp. 304-326. Rangoon: Board of Publications, Burma Baptist Convention.

5.　日本語文献

飯島明子 2004.「タウンジーとその周辺におけるカジノキ紙の生産と流通，利用の伝統と現況」『ミャンマー北･東部跨境地域における生物資源利用とその変容』（平成13年～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（２））研究成果報告書）
――――. 2007. 「シャン州南部に手漉き紙をたずねて」『自然と文化そしてことば』No.3: 96-105. 言叢社（葫蘆舎）
飯島茂 1967. 「カレン族問題とビルマの苦悩」『国際政治』No.36（「開発途上国

の政治･社会構造」）
石井米雄 2003a (1975).『上座部仏教の政治社会学』（東南アジア研究叢書 9）創文社
――――― ほか監修. 2003b.『新訂増補 東南アジアを知る事典』平凡社
伊東利勝 1994. 「ビルマ農民の意識変化」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』285-306. 山川出版社
―――――. 2003. 「1888年ビルマ南部における反政庁ディスクール」成城大学『経済研究』第159号: 21-51.
伊野憲治 1998. 「ビルマ農民大反乱（1930～1932年）― 反乱下の農民像 ―」信山社
大野徹 1987. 「ビルマ語の年代記とは何か」『鹿児島大学教養学部史録』19: 5-21.
奥平龍二 1994. 「上座仏教国家」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』 90-108. 山川出版社
片岡樹 1998. 「東南アジアにおける「失われた本」伝説とキリスト教への集団改宗―上ビルマのラフ布教の事例を中心に―」『アジア･アフリカ言語文化研究』56: 141-165.
加藤昌彦 2001a. 「キリスト教ポー･カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』333-337. 三省堂.
―――――. 2001b.「仏教ポー･カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』847-851. 三省堂.
―――――. 2004a.『ポーカレン語文法』（東京大学人文社会学系研究科提出博士論文）2004年7月
新谷忠彦 2008. 『叢書 知られざるアジアの言語文化Ⅰ タイ族が語る歴史「センウィー王統紀」「ウンポン・スィーポ王統紀」』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
速水洋子 2004.「タイ・ビルマ国境域の＜カレン＞から見る民族と宗教の動態」加藤剛編著『変容する東南アジア社会』201-243. めこん
水野弘元 2005. 『増補改訂パーリ語辞典』春秋社
藪司郎 1988. 「カレン語群」亀井孝他編著『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 上あ―こ』1312-1318. 三省堂.
―――――. 2001a.「カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』253-254. 三省堂.
―――――. 2001b.「スゴー･カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界

文字辞典』526-531. 三省堂.

Two Versions of Buddhist Karen History of the late British Colonial Period in Burma (Myanmar)

—— The Kayin Chronicle and the Kuyin Great Chronicle ——

by Kazuto IKEDA

The purpose of this paper is to examine the assertions and logic of two Buddhist versions of three Karen history books, published around the last decade of the British colonial period in Burma. In those days the Karen were regarded as the second largest *racial* group in Burma, and owing to abundant records left behind by Baptist missionaries and British colonialists, they were generally represented in western writings as having been pro-colonialist during the British regime, and anti-Burman after independence in 1948. Such an impression may also be found in *A History of Pgakanyaw* (1939), the first self-portrait of a Christian Karen written by Saw Aung Hla, a Baptist author.

The 1921 census revealed for the first time with statistical precision that the majority (77.3%) of the Karen were actually Buddhist. However, ethnological details regarding this group received scant attention, and remained largely ignored until the end of British rule. In this context, the significance of the *Kayin Chronicle* by U Pyinnya (1929) and the *Kuyin Great Chronicle* by U Saw (1931) are noteworthy, as they constitute the first assertion by Karens as being a Buddhist ethnic group.

The authors appear to share similar sentiments. Writing in Burmese for Burmese readers, they sought to prove that the Karen were an authentic people (*lumyou*) comparable to the Burman and Mon in the Buddhist world, with dynastic lineages of their own kingship (*min*) leading back into the remote past, and a group faithful to their religious order (*thathana*). This linkage of *lumyou=min=thathana* was presented in both works in order to persuade skeptical readers, who in the 1920's believed that the Karen were too primitive to constitute an authentic *lumyou* of the *thathana* world, since they lacked the tradition of Buddhist *mins*.

Further analysis of these texts will cast new light on the social formation of Karen identity among Buddhists in the 1920's. This will also lead us to consider the historical process whereby the *quasi*-ethnic idioms and logic innate to the Burmese-speaking world have been transformed in the face of modern and western notions of race, nation and ethnicity, that were brought about by the colonization of Burma.